

江見水蔭作
八幡白帆畫

泣なかぬ女をんな
(後編)

大阪 樋口隆文館發行



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



子116
490



泣かぬ

女 をんな

(後編)

八江
幡見
白水
帆蔭
畫作

大正
4. 6. 15
内交



■ 次目説小刊新館文隆口樋 ■

同	同	新	匠	同	同	小	嶋	同	同	鹿	泉	同	行	同	同	同	同	江
		田	名			嶋	川			嶋	鏡		友					見
		靜	子			孤	七			櫻	花		李					水
		海	作			舟	石			巻	作		風					隆
		作				作	作			作	作		作					作

愛富戀可梅春花罪海戀女七因龜女探大泣三

の憐 待咲 のの賊 偵正か
 との の花 つく 豪敗三 本果甲馬 五怪
 淵棄 の人

財力瀬兒録人家 傑者人櫻經組賊娘女女人

の大多に上紙聞新の地各西東に物版出の館文隆口樋
 い白面極至もでん讀なれど付に物るたし博を評好



泣

か

ぬ

女

(後編)

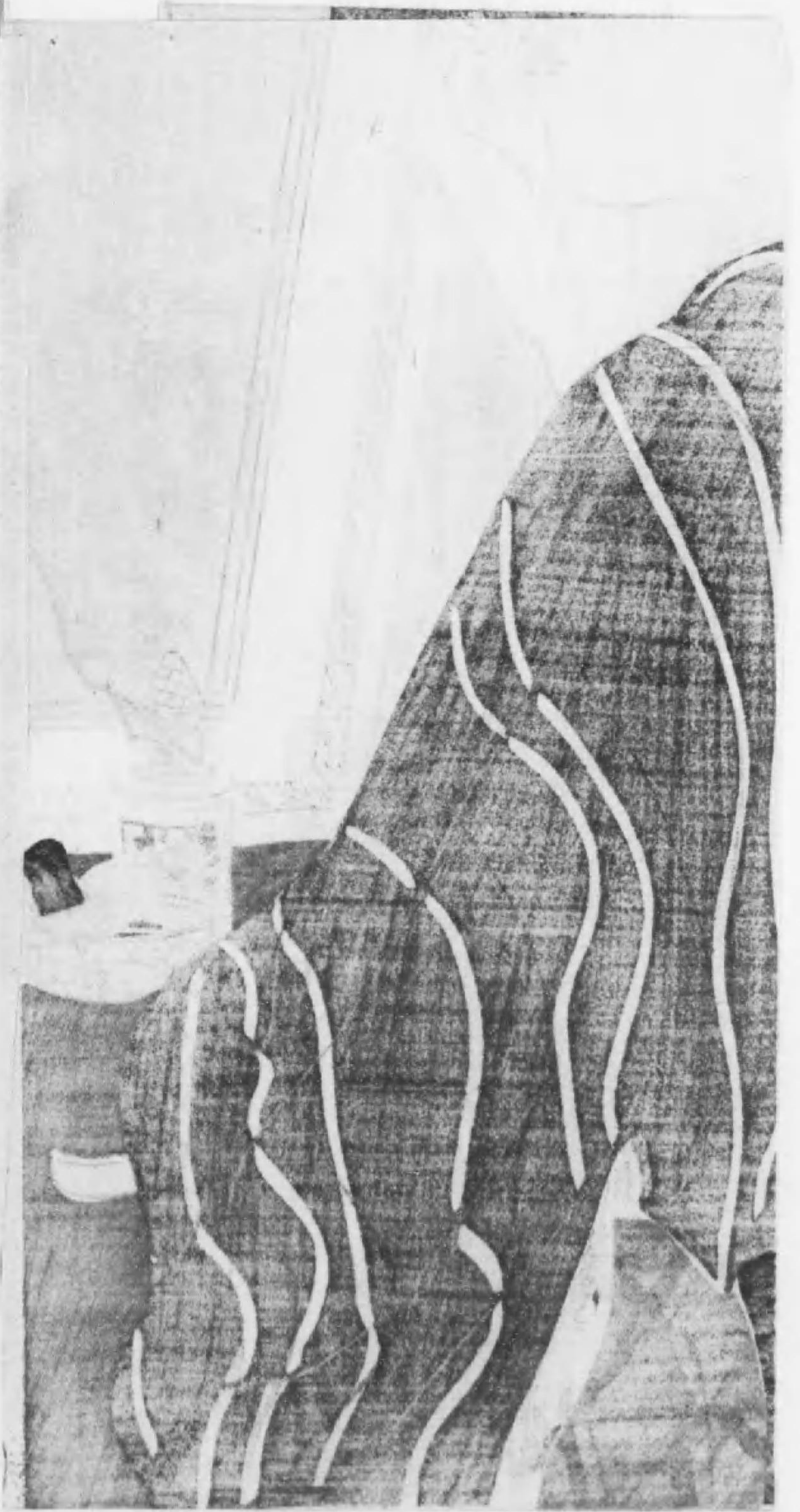
江見水蔭

(一)

道成寺の白拍子で大評判となり、常美から感謝の花を贈られてから、登女子に對する房子の態度は一變した。

それで房子から母上に何か言つたと見えて、登女子は姫のお附きから轉じて、後室附の方に變つて了つた。

従つて常美が訪問に來ても、登女子は顔を合せる事が稀に成つた。



三月の末に成つて、後室は相摸腰越の別荘に行かれる事になつた。お供の中に登女子も加はつた。

渦邊家の腰越の別荘といふのは、後に津村の山を負ひ、前に神戸の濱を抱いて却眺望が佳い。

海坊主も然う何時までも東京には居るまいし、それに登女子が今里に來た事も知らなければ、それから又先きの腰越に行く事までは知り様が有るまいと、其方に安心が出來た。

登女子は相摸の海邊を初めて見る。銚子の方とは違つて、景色も美しく、又東京横濱からの人出も多いので、却々に賑しい。

鎌倉へもお供をした。江の島へもお供をした。面白い事だらけである。初めて心がゆつたりと持たれた。

これでは如何やら幸福の方面に向つたらしい。一生斯うしたお屋敷に御奉公をし

て居れば、安樂だど、そんな考へも起つた來た。

今日に於て銚子の生活を考へると、寔に薄氷の上を履んで居た様な心持がして、慄然とするのを禁じ得ない。

殊に麗らかな日に、東京から河宮の常美の君が訪問に來られた。

此時後室には、他の女中を連れて、散歩に出て居られたので、其事を登女子は告げた。

「あつそれでは叔母様のお迎へに、お前行つて來て呉れないか。大概見當は着いて居るだらうからね」と言出した。

「はい、あの片瀬の方だと存じます。松原で松露でもお取りに成つて居らッしやるかも存じませぬ……」と登女子は答へて、早速庭から草履を穿いて、砂路を走つた。

腰越の濱から片瀬の濱、ついで居る。

江の嶋の棧橋近くまで行つて見たが、後室の姿は見えないので、もしや松林の中か

それとも龍口寺の方へでも行かれたかと、引返して、砂山の小松の間から、大松の林に入らうとした時に、ひよつくり砂垣の後から出て来たのは常美。

袴も羽織も脱ぎ捨て、矢張庭から出られたか、草履である。

「叔母様は見えない？」と問ふた。

「どうもお見えに成りません」と答へた。

「なに、見なければ、それで好いよ。實は如何でも好いんだから……」

「如何でも好なんて……おほ、おほ、」

「實はお前とゆつくり話したかつたので……」

「わッ……」

「直後から附いて来たんだよ」

「妾にお話なんて……妾は……あの姫様から……御機嫌を損じて居りますのですから……」と言ひつゝ、登女子は急いで歸らうとした。

手首の痛くなる程持つて引留めて。

「僕も房子さんから酷く感情を害せられて居るんだ。如何も仕方が無い。これが極端まで進むと、許嫁が破れるんだらう。然うなれば却へて幸福かも知れない」

「まア、そんな事を……誰か他の者でも聴きましたら、大變で御在ますわ」

「だから他の者の聴かない場所を此所に撰んで話をするので……お前に話す分には一向差支なからうと思つてるのよ」

「妾、そんな事を承はりますと、如何して宜しいか、全く困りますわ」

「困らせるつもりで僕は話すので無いんだ。喜ばせるつもりなんだが……お前の方では困るのかねえ」

「既う後室様も表通りの方からお歸りで御在ませうから、さア、彼方へ参りませう」

「いや、實は此方へ来たのも、叔母様の訪問は第二第三で、第一はお前と話したいからなんだ。まア此草の上に……僕は斯うして轉がりながら話したいんだよ」

常美が自分だけで草の上に轉がるのなら好いが、登女子の手を持つた儘で然うしたので、持たれた者は勢ひ其前に、膝頭を突かねば成らなく成つた。

濱から歸る漁師達は、變な顔をして此方を見て過ぎる。

常美は誰が見て居ても敢て恥する處無しといふ決心の色を示して。

「僕は今日まで好きな物を食べて、嫌ひな物を食べた事は無かつたのだ。誰だつて然うだらうと思ふ。厭な物を無理に食べなければ成らないといふ、そんな譯は有るまいと思ふんだ。然うだらう。食物既に然りだ。見る物。聞く物。感じる物。何んだつて然うに違ひないんだ。況んや其妻だね。一生の苦樂を共にする妻に、嫌つてる人を持つには及ばないんだ。いや、嫌つてる嫌つて居ないでなく、好いた人を目

分の妻にしないといふ法は無いんだ。一番好きな人を妻にしない様なら、死で了つて方が増しかも知れないんだよ」

「左様で御在ますか」と登女子はわざと餘所々々しく答へた。實際常美が熱して居るのに連れて、同じく熱した答へをしたら、此所で何處まで話が進むか知れぬと、其を充分に警戒したからである。

それが常美には氣に喰はぬ。

「そんな冷淡な事が有るもんか。お前には僕の心が分らないのかねえ」

「でも……貴郎……それは御無理で御在ますわ」

「いや、僕には無理はないので、唯周囲の者が僕と房子とを不自然に結合させ様として居るんだ。僕はお前を見ない前には、それ程にも思はなかつたが、既うお前を見てからは、房子は妻には出来ないんだ」

「それでは又、妾より他に、お氣に召した方が出来ましたら……妾は矢張御用が無

いので御在ませう」

「それが又有るだらうか。お前以上の美しい人が此後出て来るだらうか」

「おからかひ遊ばしては困りますわ。妾は素性の知れぬ女……貴郎は華族の若様では御在ませんか」

「その華族が、お前の氣に入らぬのなら、爵位を辭する方法も講じられる」

「そんな貴郎……そんな事を遊ばしては……」

「だが、それだけの決心を僕は持つて居るんだよ。それを示して置かなければ成らないんだ」

「どうか御戯れを仰有らないで……房子様に惡ふ御在ますから」

「房子さんに悪くツても僕に善ければお前だつて好いちやア無いか」

「決して、そんな……譯には参りませんわ……既うそんなお話……妾、本統に困りますわ」

登女子は初めていある。此様な貴公子から斯うした熱烈の態度で言ひ寄られるなんて、今までに無い。

綺麗な御方だ。身分の有る御方だ。あの様な方の奥様に成る人は、嘸幸福だらうとは考へて居たが、自分が其御方から斯うして説かれ様とは、思ひも寄らぬ處であつた。

他人の事を考へず、自己本位で量つたら、どちらに轉がつても損は無いのだが、登女子としては然うも行かぬ。

所詮未遂の戀ならば、始めから思はぬが身の爲である。

それには、賣國奴の娘であるといふ素性を委しく打明けたら、必ず愛憎を盡かされるだらう。それに限ると登女子は心着いた。

が、扱て、それが容易に口から出るもので無い。自分の父はこれ……だと、如何してそれが語られ様。

登女子がもじくして居るのを、そんな心は知らぬ常美。
「え、如何したの。何故黙つて了つたの」と問詰めた。
これを松の木蔭から窺ひ見て居る一人の旅客がある。

(三)

その旅客といふのは、古いインパネスを着て、學生用の鞆を肩から提て、手に太い洋杖を持つて居る。
髪の長く延びて居る上に、一寸のツけた様な烏打帽の冠り方が、甚か不格好だ。
揉上げから續いて髭を生やして、黒眼鏡を掛けて居る具合が、如何しても胸に一物ある人どしか見えない。

これが常美の目に入つたら、忽ち話を中止して、別荘へ歸つたらうが。生憎それ

が見えなかつた。

登女子が又これを見出したら、一層不快に感じて此所を去るべく迫つたらうが、矢張怪旅客が眼に觸れなかつた。

「ねね、登女子、お前は決心が無い様だね。そんな事ではいけないよ。今はお前、躊躇して居る場合では有るまいと思ふよ」と常美から促し立てた。

「でも、餘り勿体ないお話ですもの。妾は如何しても、おからかひ成さるとしか考へられませぬわ。さア如何か御別荘へお歸りを願ひます」と登女子は言ひつゝ、膝を突いて居るのから立上つた。

その手を持つて居る常美は、自然に起上らざるを得なく成つた。

「いや、此所で返辭が聴かれないのなら、一緒に別荘へ歸る途中、歩きながらでも好い、又別荘に今夜泊めて頂くから、今夜お前の處へ、聴きに行つても好い」

「あら、そんな事を……」

「からかふの、冷かすのと、そんなのでは無いんだよ。極めて真面目なんだよ」

「だって、妾の素性も能く御存じなくって……」

「そんな事は如何でも好いんだよ。私は唯お前を愛するので、系圖を妻に仕ようと
いふのでは無いんだよ」

「ですが、妾の親が、何んで死んだか御存じ有りますまい。それを申し上げたら、
屹とお考へなさいますわ」

「肺病で死んだといふの」

「いゝえ」

「まさか癩病でも有るまいね」

「まさか……」

「ちやア何んで死んだの」

「それを申しますからには、如何か妾をおゆるし下さいまし」

「それを聞いても、些ども驚かなかつたら、お前も私をゆるして呉れるだらうね」

「……そんなに貴郎は妾を……妾の様な者をお思ひ下さるので御在ますか」

「思ふ……それ程に思つて居る僕に、何故然うつらく當るのだえ」

二人は松の下を立上つただけ覺えて居たが、それから海岸を歩き出したのは全
然夢中で有つた。

怪旅客は間を置いて、其後を附けて居るが、二人には未だ分らない。

足下に浪の打寄せるのも分らない。

前を磯千鳥のかけるのも分らない。

登女子は思ひ切つて父の身の上を物語つた。非國民との嫌疑を受けた儘、露領に
死んだといふ事を打明けた。

常美は一時愕然とした。

が、餘程深く決心したと見えて。

「お前が賣國の行爲をしたといふのぢやア無い……」と言ひ掛けた。
「でも、妾の父親がですわ、耻かしい事をした事に成つて居ますんですから……」
と登女子は血を吐く様に言ひ添へた。

「僕はお前の親を責めると同時に、お前が、その爲に、悲境に居るといふ事を、い
どしく思ふのだよ。世の中の人の様に、親が悪人だからと云つて、其子を憎む様な
事は、如何しても僕には出来ないんだ」

「それ程までに思つて下さいますか」
勿論だよ」

話が極度に熱した時には、既に別荘の裏庭の木戸口まで来て居た。

(四)

庭の木戸口に突當つたら、又其成りで話を進める處であつた。常美の熱して居る
のは勿論の事。登女子とても熱し切つて来た。意外に話の纏まりが早さうに見えた
處へ、内の方から俊子刀自が出て來られた。それで忽ち二人は沈黙に入つて了つた。
刀自は表門の方から歸つて來たのであるが、自分を迎へに出た登女子も其後を追
うて出た常美も、却々戻つて來ないので、それを心配して、此所まで出られたので
あつた。

それで常美は刀自と共に座敷の方へ行かなければ成らなく成つた。

登女子は一人で勝手の方へ廻らなければ成らなく成つた。

此わかれの時の常美の眼には、強い感情が燃わて何事かを語つて居た。其意味は

どんなにでも取れるので、登女子は實に迷はざるを得なかつた。
 斯うして常美の側を離れて見ると、登女子は急に覺醒を催して、そんな事に成つたら御後室にも濟まない。第一又房子様にも濟まないど考へ出した。
 濟む濟まないの問題を無くしても、そんな事の出来るものでは無い。身分の相違は何處までも二人の間の溝渠である様に、そんな風にも考へ出した。
 然うかと思ふと、直き其處に幸福が接近して來て居る。既う一寸で手が達くのを見す／＼此方で手を引く様にも考へられる。
 誰やら耳の端で、そんな勇氣の無い事が有るものか。萬難を排しても添遂げよと説立てる様にも思はれて成らぬ。
 這んな風に、いろ／＼考へるので、今までの快活さも、妙に沈んで、時どきは喪心者の如き場合さへ有つた。
 常美は後室の御相手をして、碁など打つて日を暮らされた。

夜に入つては御酒が出て、登女子は其お酌をしたが、唯二人で語り合ふ機會は來らなかつた。
 十時過ぎには皆寢に就く事と成つて、常美も別室に泊られる事と成つた。
 お上で御寢みに成つた後は、急いで皆それ／＼に眠りに入つた。
 一間に登女子は如何しても眠られない。
 今日砂原の光景が浮んで出て、耳の傍に常美の囁きが聴えるかと思ふばかり。もしや斯うして居る處へ、木戸口で切れた話の後を繼ぐ爲に、常美の君は、忍んで此所へ來られは仕ないだらうか。
 そんな事は無いとも云はれない。晝間のあの熱した様子が、偽りで無いとすれば其位の事は仕難くない御方である。
 それを誰かに見附けられたら、如何しやう。後室様や房子様の御立腹が思ひ遣られると考へると、恐ろしさに早や戦慄さへ生じるのである。

十一時が鳴り、十二時が鳴つた。沖の方で漁船が如何かしたか、連りに叫ぶ聲が聴えて居たが、それも止んだ。
千鳥のかけり啼くのさへ聴えず成つた。
此時に、何時の間に廊下を傳つて来たのか。少しも足音が仕なかつたのに、突然障子を開く音が聴え出した。それも微に、いと微に、忍んで、そろり、そろりとである。

あッ常美様かと思ふと忽ち、夜具の中が火に成つた様に赫と感じた。

然うして顔を襟の中に入れて、髪のコわれるのも厭はずに居た。
息を殺して寝鎮まつて居ようとしたが、胴顔ひがして、それが出来ぬ。

いやに枕の底が鳴る様に感じられるのである。

忽ち重い物が蒲團の上に乗つて、密とゆすぶり起すので、今はと許り、襟から恥しながら顔を出して見ると、常美の君どころか。

怪しの曲漢!

(五)

驚く間も何も無い。吐いた息を引く間も無い。目の前に短刀がキラリ。八景園で狂畫家に突附けられたよりも近く迫つて居る。

登女子は唯目を睜視いたばかり、瞬き爲る事も出来ない程だ。

曲漢の顔は電燈の光で能く見えて居る。髪の長く延びたのが渦を巻いた様に縮れて居る。頬から頤へ猪熊の様な髯が生えて居る。それで黒眼鏡を掛けて居る。

何時の間に来たのだらう。正しく持兇器強盗だ。

それが蒲團の上に乗つて居るのだ。如何する事も出来るものではない。

「こら、聲を立てると一突きた。好いか」

其聲には何んだか聴覚えがある。併し其顔には何の記憶も無い。

「おい、登女子、心配するな。俺だぞ……」と言掛けた。

「えッ……」

「叱ッ。お前の方から口を利いちやアいけねえ。黙つて……俺の方はドスで行くし、話し具合で、他に聴ねえ秘傳を知つてるが、素人の女の聲は如何も高く響いていけねえ」

強盗は制しながら、馬乗から下りて、其短刀をズブリ畳の上に突立てた。

登女子と云ふ名まで知つて居る。ハテなど思つて猶も其の顔を見詰めた。

強盗は先づ其のインバネスを脱いだ。黒眼鏡と附け髯を同時に取去つた。

意外にもこれは芳山章太郎と假稱した前科数犯の大賊！濱町の隠れ家から逃げ出して、非常線を潜り抜け、行方不知に成つて居た、それであつた。

「あッ芳……」と登女子は思はず又口走掛けた。

「叱ッ、黙つて……口を利くな。それとも聲を立てると、一突きだ……まア静かに……こら、俺は今日晝間から附けて居たんだ。馬鹿にしてるぢやアないか、若い男と一緒に手を引合つて、わッ、あの醜態は何んだ。あの時直ぐに飛び出して、あの若い野郎を突殺して、お前の手を引いて逃出す位の大膽な遣口は、俺には出来るんだが、何もそんなに急ぐ事はねえと思つて、今夜ゆつくり出直して来たんだ……や折角来た序でだから、俺は此所の後室の寢所へ忍び込んで、十八番の秘法を行つて大仕事をしなければならねえ、その上でお前の手を取つて落ちて行かう。よもや厭だとは云はないだらう。お前は喜んで俺に附いて来るだらう。如何だ。いやか。おうか。首を振つて合圖をしろッ」と怪賊は言込んだ。

それを承認出来るものではない。登女子は床の上に起直つて、手を合せて拜んだ。

「何故お前は、留めるんだ……おツと籠入つた話は、手真似や顔附では出来ないだらう……斯うしやう。お前は頭から夜具を冠ると好い。俺は夜具の袖の處に耳を宛

て居るから、それでお前は夜具の中で一人で喋るんだ。然うすれば他へ漏れねえ」と言ひつゝ、無理に登女子をして然うさせた。

登女子は息苦しさを忍びながら。

「どうか後室様だけは……助けて上げて下さいまし」

「それでは若い奴を殺しても好いか」と夜具の袖から芳山は言入れた。

「どうか、そんな手荒い事は……」

「ぢやア何んにも仕ねえから、お前は直ぐと俺に手を引かれて逃出して呉れるだらうなア」

「だって……それは……」

「厭だと云やア後室と若いのを弄り殺しだぞ」

「そ、そんな無茶な事を……」

「俺としては、それが當前なんだ。少しも無茶では無んだぞ」

(六)

大賊芳山はどんな惨虐な事を爲るかも分らないのだ。全く後室や若殿の生命を絶つなどは何とも思つて居ないだらうから、其意に逆らふといふ事は危険此上も無い。

と云つて登女子は自分が運出されるといふ事は、此場合非常な苦痛である。

折角身の落着き場所を得て、幸福といふ物の味を幾分か知り掛けて居る處である。何やら其處に物が有つて、それに最少して手がどゞき掛けて居る様に思はれて居るのに、それを捨て此處を出るといふのは、此上も無い不安である。

人もあらうに、大賊に連れられて、此所を一步でも立出でたら、既う貞操は滅茶滅茶に破られ様。のみならず、強盗の情婦と成つた汚名は、一生抜ける事では無い。

誰か早くそれと覺つて、巡査でも呼んで来て呉れぬだらうか。或は又彼方で聲を

立て騒ぎ出しては呉れないかと、そんな事を登女子は念じたけれど、何んの役にも立たぬ。

「さア、登女子、如何するんだ。場合に由つては此別荘に居る者を残らず殺しても好いんだぞ。片端から命を絶つ……うむ、お前の命も無論絶つツ」と臭い息と共に夜具の袖から芳山は聲を吹入れた。

これは逆も助かり様も無い。どの道殺されるものなら、自分の身を犠牲にして、他の人を助けたい。責めてこれがお世話に成つた御當家への御禮であると、登女子の考へは漸く極つて。

「それでは妾、一緒に此所を出ますから、どうか皆様にお怪我をさせない様に。ね、お願いで御在ます」と夜具の中から答へた。

「好し。それでは、さア、早く……」

言ふ間も早や手を掛けて、膏藥でも剝がす如くに蒲團を捲り取つた。

それから無言でふるふる額へて居る登女子を引立て廊下へ出た。

芳山の足音は一ツも立たぬが、登女子のは如何しても高く響いて困る。

でも直雨戸が一枚開けてある處から、庭へ降りたので、一息出来た。

事情を知らぬ後室様や、常美様は、さぞ妾の出奔を怪しく思ひ給ふであらう。或は泥棒の手引でもした様に疑はれるかも知れぬ。皆様を助ける爲めに自分が犠牲に成つたとは、逆も知れずに終るであらう。

扱て、自分は、此先に、隙間を見て逃出して、それで、再び捕まつたら、潔好く芳山の手につけて殺されて了ふばかり。これ程の妾の心を、責めて常美様にお知らせして、それで妾の様なものを、お戯れにもせよ、戀慕うて下さつた御心の嬉しさに、少しでも報りたいとまで登女子は考へた。

だが芳山は少しも猶豫を興へて呉れぬ。砂路をグン／＼引立て、垣の外に出で、松林に分入つて、其所に隠して置いたシヨールとコートを出して、登女子に着さ

した。何處かで盗んで来た品であらう。

「片瀬川の川尻に船がある。それに乗つて大磯の方へ落ちて行かう。船の上でゆつくり俺の本名も名乗つて聴かさう。濱町で別れてから、それから俺が如何したかといふ事も聴かして遣らふ。エレキのお金は入牢して居るんだ。當分お前は俺の女房に成るんだぞ。心配するな。眞晝間堂々と自動車に乗つて、日比谷の大神宮へ乗込んで、富豪や華族に敗けない立派な婚禮の式を擧げて遣らふよ」と芳山は言ひながら、登女子の手を引いて松林を出た。

月がある。浪打端には黄金の粉を散らす様に潮の花が光つて見える。

登女子は一步步死に行く身と覺つて來ると、意外に氣の強味を覺えて、隙間が有つたら短刀を奪つて、アベコベに此奴を突殺しても好いと考へて來た。

だが又芳山の方でも少しも油斷を仕ない。斯うして片瀬川の川尻に行着くまでに登女子は片頬を三たび、潮の飛沫に濡らされた。

(七)

片瀬川には水が出て、それに折節の満潮に、川尻は常よりも擴がつて居る。

砂山の根方近く漁船が一隻引上げてある。それに先づ登女子を乗らしめた。

乗らして置いて芳山は、船を先きに艦の方へ廻つて修羅木を敷いた上を押出した。地から水までは幾分か勾配が有るので、何んなく水に舟は浮んだ。

直ちに芳山も飛乗つて、棹を突張り出した。川と海との境目に、流れる水と、上げる潮と、激しい争闘を起して居る。其所を乗越すのは却々熟練を要するのだ。

それを苦も無く通過し得た芳山は、決して此道にも素人では無い。

登女子は船に乗るまでに、如何か仕ようと思つたのだが、少しも隙間を見出さなかつた。

既う海へ出ては仕方が無い。最少し沖へ出た處で、飛込んで死ぬより別に好い工風は無く成つた。

今直ぐ此所で飛込んで、芳山は激怒の餘り、別荘へ取つて返して、どんな仇をするかも知れぬ故、江の島を少し離れてからでなければ成らぬと、胴の間に突伏して縮まつて居た。

「安心しろ。船で稼いだ事も有るんだ、大磯までは樂に消ぎ通して行つて遣るよ」と芳山は言ひながら、棹を船に持替へて漕出した。

大分動揺するので、登女子は氣持が悪く成つた。

「寒いといけねえ、風邪を引かしちやア可哀さうだからな」と芳山は言ひつゝ、苦を足の先で掛けて呉れた。

半里餘りも沖へ出たらしいので、既う此邊で飛込まふかと、登女子は密と頭を擡げた時に、船を捨て芳山は、板子を帆の代りに立てながら。

「風が好いから斯うして置いて、少し休むと仕ようと。なアに白々明けに向ふへ着けア、好いんだから……」と言ひつゝ、登女子の傍へ來た。

それから苦で風を避けて、燐寸を摺つて巻蓑を燻かしながら。

「何より先きへ名乗つて聽かして置かねえちやア成らねえ。俺の本名は芳山章太郎てえのちやアねえので、仲間の内では噴火小僧と綽號を取つて居る前科五犯のお泥棒様だ。これでも戸籍面には小室淺之助と名乗つて居るんだ。亭主の名だから忘れなさんな」と打明けた。

登女子は少しでも油断をさせる爲に。

「既う妾の運命は、貴郎に押へられて了つたのですから……小室淺之助といふ大泥棒を、妾の良人だと思ひますわ」と思ひ切つて答へた。

「好し。それで俺も安心した。濱町の中二階で、どの道他人では無く成る處だつたのだ。それが相摸灘の浪の上で、纏まるんだ。悪かアねえなア」

「濱町のあの騒ぎで、わかれ〜に成りましたが、あれから何方へ逃げたんです」
 「其話も好いけれど、俺は何だか睡く成つた。苦を掛けて、一ト寝入りしてえもんだ」

「あ……あれッ……浪が打込んで来すわ」

「なに、大丈夫だ」

「あッ……」

「そんなにお前、体を動かしては、船がひっくり覆るぢやアないか」

不途氣が着いて見ると、風が變つて、船は逆行して居る様子。

「ちえッ仕様がねえなア。折角一休みしようと思つたのに、これぢやア寝る處ぢやアねえ。船柄を攫んで一汗掻かなくツちやアならねえ」と不平を零しながら、噴火小僧の淺之助は立上つた。

大山風が吹附けて、折角漕出したのが。何んにも成らず、直きに江の嶋へ戻しさ

うだ。

淺之助は一生懸命に成つて漕出した。

船の動搖は非常である。木の葉の風に舞ふ如くである。

これにいつしか登女子は酔つて、寝返りを打つ事さへ出来なく成つた。従つて逆も身を海に投げるなど、そんな身輕の事は出来なく成つた。

(八)

荒れ出したら相摸灘位、船に悪い處は無いのである。三浦三崎と伊豆の眞鶴との出張の間に、大嶋沖からの悪潮流が突掛けて来る。それを又陸路から、大山風で吹返へすので、方向に迷ふ浪頭は忽ち跳り上つて、天でも衝かうとする、所謂三角浪の奇形を現じて、之に弄ばれる船の運命は、大概悲惨に終るのである。

噴火小僧の小室淺之助が、如何に巧に櫓を操つても、此の難場を漕抜けるのは却の骨である。

篋棒奴、此位のことでは平太張る様ぢやア、沖津白浪の張本とは云はれねえのだ。昔嶋破りの罪人が鹽に乗つてさへ越した海なんだ。満足の船で越せねえ事が有るもんか」

淺之助は我と我を罵りながら、漕ぎ抜いたが、逆も人力で抵抗の出来る風浪では無い。

淺之助の手足は疲れ切つた。其息は切々に迫つて来た。

「えッ、斯う成ると色戀よりも命だ。美しい女よりも荒ッばい男の手代りが欲しいのだ。好いや、併し、イザ溺死と成るときには、責めてお前の体と繋ぎ合せて、死骸だけでも抱合心中で流れてえもんだ」

そんなことを淺之助が口走つて居る間に、瀧の如く海水は船中に入る。

水はいくら入つても沈没は仕ないが、顛覆が一番可怖いので、其を防ぐ爲に、棹や櫓を横に張つて結付けなごした。

然うして最う淺之助は胸の間へ来て、登女子を海に振落さじと、濡れながらシツかり抱へてゐる。

此時の二人には、何の感情も發する餘地が無い。生る、助かる、より他には無い。だが、刻々迫る寒冷の度には、如何に意志の強い女でも、如何に悪事に長けた男でも、敵し得ない。次第々々に感覺を失つて、後には睡い様な氣さへ生じるのである。

寝入つたら大變。眠つたらそれで凍死すると思ふので、互ひに体温を保ち合ひつ

「登女子！」

「小室さん！」

互ひに名を呼び合つて居た。

其間に船は非常な速力で流れるのである。

或は暖流の一部に乗つたのか。大分海水の温度が昇つて来た。

「助かるぞツ、安心しろツ。其代り八丈嶋へ行くか。小笠原嶋へ流れ着くか、分らねえぞ」と浅之助は呼はつた。

「何處でも好い、助かれば……」と登女子は獨語の様に言つた。いや寧ろ夢現で有つたのだらう。

既にして月は落ちた。風は益々吹荒むが、夜の明けに近からうとする時に、船体はドンと突當つた。

岩礁が黒く前面に横たはつて居る。

其拍子に登女子は胸を強く打つたので氣絶した。

浅之助は勇氣を起して、小脇に登女子を引つ抱へながら、水船から岩礁へと飛ん

だ。

片手は巧く岩角に掛つたが、其の時した、か右の膝頭を打つた。

ハツと思つて手を放しさうにしたが、此所が生死の別れと一生懸命、辛うじて岩礁の上に這上つた。

此所は何處？

八丈嶋？小笠原嶋？其他の小嶋？

いや、意外にこれは近い。伊豆の伊東沖の手石嶋らしい。

未だ全く夜が明けぬので分らないが、兎も角も、浪の來ぬ岩影へ、登女子を運び海草の打上げられて乾いて居る中に寝かせて、活を入れたり、人工呼吸を施したりした。

幸ひに登女子は息を吹返した。

それを見て今度は、浅之助の方が、ガツカリして来た。

(九)

二人の漂着した岩嶋は、伊東の潮吹岬に近い手石嶋といふのだ。嶋とは名に呼べど實は岩礁の大なるに過ぎ無い。従つて人の住むべき處では無い。

大賊の噴火小僧としては、却つて斯うした處へ流れ着いた方が好いかも知れぬが登女子としては死の道が有つても、生きる方角が逆も無い。

噴火小僧は、負傷や疲勞やで、今ウツトリとして居る。此間に逃出せば、いや、海へ身を投げて死ねば、それで登女子の貞操は全いのであるが、斯う成つて見ると然うも出来ぬ。

自分の氣絶して居たのを助けて呉れたのだ。其の人が今衰弱して、死に瀕して居る處を、見捨てるのも甚だ不人情の様だ。

それに暫時船中で、濡ながらも体温を保ち合つた親しみは、そんなに敵意を生じるを許さない。のみならず、此様に負傷して居ては、今直ぐ貞操を破るべく迫りさうも無い。

助け返した其後に、又方法も有るだらうと考へて居る間に、旭日は初嶋の彼方から輝き出した。

だが、逆も日の光などで、濡れた衣服や凍えた肌が、急に恢復しさうも無い。浅之助は微かな聲で。

「焚火！焚火！」と言掛けた。

「如何して焚火するのですか」と登女子は問うて見た。

浅之助は無言で帯の處を示すので、見ると時計を鎖で巻付けて居るのみ。火の出る道具は何んにも無い。

「時計で如何するのですか」と再び問うた。

「ガラスを取つて……水を一滴垂らして……光線を呼ぶ……木の屑へ、それを……」
と切々に教へた。

なる程と會得して、登女子は先づ岩間に挟まる流木の乾いたのを拾ひ集めた。

其中で最も能く枯れた一本を撰み、石と石とで打つて、房の様にした。

それに向つて硝子を當て、日の光を集中させた。忽ち火熱を發して、燻り出した。

それから丹精を凝らして、ヤツと焚火を作り得た時には、最う淺之助は半死の状態であつた。

風を防ぎ、日を受ける岩窟の口元に、幸うして淺之助を運んで置いて、盛んに此處で焚火をした。

漸く正氣に復して來た。

それから二人で、濡れた衣服を、着の儘で乾かすのに餘程骨が折れた。

体が温まつて來ると、急に覺えるのは睡眠で、それに次いでには飢渴である。

幸ひに蠟が岸壁に附着して居るので、それを取つて一時を凌いだ。

「登女子、残念だ。俺は右の足を一本利かなくしたので、如何する事も出来ねえ。

此上はお前に當分養つて貰ふのだ。や、それとも好い幸ひにして、俺を捨て逃出さか。又警察へ密告でもするか。如何だい」と噴火小僧は言出した。

「妾には。逆もこれだけの海は泳ぎ切れませんから、逃様といふ氣は無いのです。

又逃げられないからには、密告仕ようも有りませんわ」と登女子は答へた。

「違へねえ」

「どちらにしても、お前さんだつて、妾だつて、斯う成れば生きなければ成らないんですからね。妾は貴郎の介抱を仕ませうから、其代りね……どうか妾に無理を言掛けない様にして下さいよ」

「無理といふのは、夫婦に成れといふ事なんだらう。今、痛くつて、それ處か……さア此所をビタ〜と始終冷やして置いて貰ひたい。骨が如何かしたに違へねえの

だ

誠に今は、如何も仕ようが無いらしい。

登女子は藻屑に海水を浸しては、絶へず膝頭を冷して遣つて居た。

少しは苦痛が薄らいだが、淺之助はウトウトと眠り出した。

登女子も亦眠くて耐えられぬ。

と云つて、寝て了つては、焚火が消えて了ふかも知れぬ。それやこれやで、餘程我慢をして居つたが、昨夜からの疲勞が出て、つい、うとうとと眠りに陥ちた。

(10)

それでも直に目が覺めて、登女子は半身を起した。幸ひに焚火は能く燃えて居る。又噴火小僧も能く睡つて居る。

それに安心して又睡りに入ると、今度は大浪が寄せて、押冠せた様に思はれて、目を覺した。

いや覺したつもりなのだが、それが夢なのだ。

夢の變化は種々に成つて、矢張渦邊家の別荘に寝て居る様な氣がする、蒲團の上に乗つて強て結婚を迫るのが、常美の様にも思はれる。淺之助の様にも思はれる。

後には海坊主の勤兵衛が出て来て、岩に附着して居る蠣の貝を、無理に爪の先で剥がして、其實を生で甘さうに啜る様にも思はれるのである。

其間、海から大きな蟹が出て来て、缺で股の邊を捻ると見た夢の半吃驚して目が確實に覺めて見ると、意外にも怪物が此嶋へ上つて来て居る。

男だか、女だか、いや動物だか、人間だか、分らない様な、半裸体の——それでも腰巻を締めて居る、赤銅色に光る者。

髪の毛の長いのだ、乳房の大きいのだで漸く女と鑑定は着いた。従つてそれが海を際

ぐ蟻といふ事が分つた。

向ふでも驚いて居るか、眼を睜視つて居る。察する處、偶然此所へ貝でも取りに来て、此体を見出したのであらう。

「お前達けえ、此所で焚火して……」と蟻女の方から聲を掛けた。

「然うです」と登女子は答へた。

「人の居るべき處でねえのに、煙が上つてるからな、變だと思つて来て見たよ」

「まア能く来て下さいました」

「わしは、伊東の峠前の者で、お源ては蟻女だがね、始終潮吹の鼻から、此の手石嶋へ、海藻や貝類を取り来るだアが……お前達は、何時此處へ來なすつたよえ」

「昨夜此處へ……」

「如何して、まア、此處へ來なすつたよえ」

何んと答へて好いものか、登女子は之には躊躇した。

「え、如何して來なすつたえ。まさか、わしの様に、泳いで來たんぢやアあんぬえなア」と益々蟻女は問進んだ。

此時淺之助は漸く目を覺して。

「おう……」と初めの聲は矢張驚きであつた。

「おう、男の方は、怪我してるだね。如何したよえ、まア……」と蟻女は淺之助の方に向つて問出した。

「こ、これは好い處へ來て下さつた。私達は東京の者で、逗子へ保養に來て居つて……釣に出た處が、あの風でね、船頭は海へ落ちて、行方は知れず私達はヤツと此處へ船を打付けて……助かつたのですよ」と早速に淺之助は言立てた。

「まア、それは運の好い人だ。船頭が死んで、客人が助かるのは珍らしい。で此女の人は、お前さんの何んですえ」と蟻女は問掛けた。

無論。淺之助は、妻だといふに極つて居ると思つて、登女子は先潜りして。

「妾は、妹なんです。兄さんと一緒に釣に出て、酷い目に遇いましたよ」と答へた。

浅之助は苦い顔をして、登女子の方を見て。

「妹……妹だね、義理有る仲だ。まア妹でも好い。お前は何か云ひなさんな私に此人に答へるからね……」と口留めを打つた。

登女子のお源には、此ドサクサを別に怪しいとも感じなかつたが。

「何しろ、まア、此儘では、仕様が無い。妾は泳いで来たのだが、今、船を持つて迎へに来へえで、待て居なせえまし」と言ひつゝ、急いで岩上から海中に飛込んだ人魚の醜いのと同じ女だ。

(11)

後で噴火小僧は、猛烈に怒り出した。

「何んだッてお前は、妹だと言ひ出したんだ」と問方の鋭さと云つたら無い。

「つい……」と登女子は多くを答へないで、下を向いて了つて。

「餘計な處でお前が口を出したもんだから、到頭夫婦に化ける事が出来ねえちやアねえか。仕様がねえなア。それ程お前は俺を嫌ふのか。いや、然うだ。嫌ふのだ。好いや、俺の方にも考へが有るんだと」打つても掛らん見暮で有つたが、何分にも足が立たない。

近くに居たら、手を伸ばして、引寄せられたらうが、一寸離れて居たので、それも助かつた。

「此上は、仕方がねわ、妹のつもりで打合せなんだ。お前の名は隠すにも當らねえ、矢張登女子で好いだらう。俺は……芳……芳田章三と云つて置かう……東京市日本橋區本石町三丁目、好いか、覚えて置きねえ、化粧品の間屋の様にな」

「はい、其つもりで居ませう」
「だが、人の居ねえ處では、女房のつもりで、勤めて呉れなくつちやアいけねえせ」

「……………」

「なにしろ痛い……あゝ飛んだ事をしてしまった」

間もなく其處へ海女のお源が、船を漕いで迎へに來た。それに乗るのも淺之助には困難であつた。

直ちに手石嶋を發して、崖前といふのに船を着けた。

此處は伊東の漁師町の、一番端れで、三四軒小さな漁家がある、其中の一軒にお

源は淺之助を擔ぎ込んだ。

見掛けは穢い家だが、中に入つて見ると、綺麗に片附いた部屋もある。

お源は小さっぱりとした蒲團を出して、それに淺之助を寝かせて。

「これも何かの縁だアよ。ゆつくり氣を落着けて、わしの家で療治をさッせえ。なアに、夏場は東京から海水浴に來る人があるで、間貸しをするのでね。客扱ひを満更知らねえで淺ねえですよ」と言つて呉れた。

淺之助は隠れ家に屈強と見て。

「どうか何分お願ひする。此の儘では東京へ歸られない。せめて足でも治つたらねそろゝ熱海邊まで行つても好いが、當分如何か妹と二人でね」と頼み入つた

「あゝ、好う御在ますとも。何處までもわし世話をして上げるだア」とお源は機嫌が好い。

「それで此方には、誰か未だ居なさるの亭主殿は沖漁かね」

「それだアよ。客人、聴いて下せね。去年の秋、鯉漁にね、此字から男達が、十三人で、一隻仕立て出た處かの。暴風を食つて行方知れずさ。それで崖前には後家が
大勢出来たが、今では眞面目に男無しで暮してるのは、わしの處ど、他に二軒切だ
アよ」

「それは如何も貞女を立て、感心だなア」

「なアに、貞女を立てるつもりではねえけど、誰も婿に成り手がねわのでね、
據なしの後家だワよ。だから男の客人は、何處までも大事にするが、女は厭だ
ね。別して美しい衆は、ヤケてなんねえが、幸ひに此人は、妹だてえから、家に
入れて上げるだアよ。は、は、は、」

申戯でもあらうが、又幾分の眞面目も含んで居る。
淺之助は早くも策を考へて。

「や、何分宜しく願ひます。どうかそれから醫者を呼んで来て貰ひたいで……」

「あ、好う御在まさア。伊東には上手なお醫者が居るでね」

「これは、まア、お嬢さん、今日のお禮……いづれ食料其他は出しますよ」
腹巻の中から、未だ全く乾き切らぬ十圓紙幣を一枚抜いて出した。

お源は吃驚して。
「這んなには入らねえだよ」

「や、まア、兎に角、取つて置いて下さい。就ては、少し又折り入つて頼みもあ
る」

(一一一)

漁場の女の眼に十圓は大金と見える。お源の喜びは一通りや二通りでは無い。
「何んだって遠慮は入らねえ、頼まツしやい。わしの出来る事なら何んでも聴くべ

えで……と言入れた。

噴火小僧は利き目の早いを見て取つて、既う大丈夫と多寡を縛りながら。

「實は、私達兄弟は、少し事情が有つて、返子の方へ身を隠して居た……といふと怪しい者の様に思はれるが、實は繼母が家を搔廻して、私達二人を邪魔にするのでそれを避けて返子へ居たんです。それがそろそろ居所か突留められさうに成つたので、何處かへ又隠れ替る考へで、小船で漕出した次第なんです。それが此方へ流されて来たんでね……然ういふ譯ですから、如何か東京の方へも我々が此處へ来た事を知らしたく無いんです」と誠に語り出した。

「なる程ねえ」

「就ては近所の人や又お醫者の前に……東京の者で、それが手石嶋へ吹付けられてこれくなんて、餘り委しい事を話して貰ひたく無いのでね」

「それア恰度好い。船で此方へ連れて来る處を、誰も見て居なかつたでね」

「いや、それは見られても好いです。潮吹岩の見物に二人で来て居て、そこへお前が來合せて、部屋貸しの相談が成立つたとしても好いのでね」

「然うしませうよ」

猶細かな事を打合せて置いて、お源は醫者を呼びに走つた。

後で噴火小僧は、登女子に向ひ。

「人前は兄弟でも好いが、此怪我が全治したら、早速夫婦に成つて、此處を飛出さんだよ。それを又お前が嫌つて逃出すなら、俺の方にも考へが有るんだ」と脅かし出した。

「既う斯う成れば、仕方が有りません。妾はお前さんの言ふ通りに成つて居ます」と氣安め文句。

なに、直にも逃出したいのだが、土地不案内でもあるし、又自分も海中で冷切つて、氣絶までしたので、健康が未だ回復して居らぬ。それで二三日は此處に居て休

養した上で、決行しても遅くないとの考へを持つたのである。

軽からの淺之助の負傷故、急に迫られぬを見抜いた上でもある。

間もなくお源は醫者を連れて歸つて來た。

醫者は首を捻つて、骨膜炎でも起したら大變だからと、塗薬の上から始終冷す様

にと、手宛を教へて歸り去つた。

氷は漁場の事だから、何時でも間に合ふので、早速冷し始めた。

塗薬の他に服薬も呉れた。

氣が落着いてから淺之助は、酷く疲勞を覺えて來た。亦發熱もして來た。

登女子も亦發熱した。

明くる日、醫者が來ての診察に、二人ともインフルエンザに罹つたといふので、

又其手宛をして呉れた。

看護はお源一人であるが、却々能く面倒を見て呉れた。が、最も淺之助に向つて

親切である。

淫靡な風の吹き荒む漁場、其處に後家で暮すお源には、素より教育のあらう様が無

い。感情の勃發を抑制するなんて、逆も出来るものではない。

それで野獸に近い戀を淺之助に向つて遂げ様と考へ出したので、然うなると如何

も登女子が邪魔で成らぬ。

それに容貌や舉動で、眞實の兄弟で無いといふ事を悟つたらしく、嫉妬の念も其

處に生じて、次第々々に登女子を虐待し出した。

此様な事で十日ばかりを過した。登女子の方が早く全快したので、いよいよお源の當りは激しく成り出した。

(1111)

登女子は洞邊家とそれから白田畫伯の處へ手紙が出したくて成らぬ。突然夜逃げをしたに就ては、種々自分は疑はれて居るだらう。恩を仇で返したと誤解されて居るだらうと、思ふと残念で成らぬ。

けれども淺之助が注意を怠らぬので、逆も書く間は無かつた。

其間、淺之助の負傷及び病氣も、段々輕快に成り掛つたので、既う此處にも長く居られなく成つた。

又主婦のお源は何かに附けて、手荒く當り散らすので、愈厭で耐らなく成つた。今日は翌日はと思つて居る間に、不幸にして齒が痛く成つた。

その苦しみを見て淺之助が自分の惱みの様に心配するのを、お源は又甚悦ばな

い。初めの間は苦々しい顔で見居たが、途中から氣が變つたか。

「ねえお登女さん、齒の痛いのは、奇態に治して下さる神様が有るだアよ、それへ早速參詣して、それからお呪法を其處で爲るとね、直治つて了ふだアよ、石神様と云つてね、伊東の者で、此神様に助けて頂かねえ者はねえだアよ」と言つて呉れた。「左様ですか。それでは早速お參りいたしませう、何處ですか教へて下さいまし」と登女子は喜んだ。

「場所は、なに、濱づたひで、ゴロタ石の上が歩き難いが、此處から二三町しか無いけれど、一人で行つたのではお呪法は出来ない。好いよ、妾も案内ながら行くべえ。又近所の衆も二三人頼んで行くべえ。待つて居なせえ、打合せて来るだから」

「妾一人の爲に近所の衆まで……」
「なアに、それは仕方がねえ。誰が痛いのも同じだア。然ういふ事には濱の者は、皆親切だアよ」

言ひ捨てお源は出て行つた。
間もなく歸つて来て。

「さア支度が出来たから、來さッせえ」と誘ひ出した。

登女子は、常に似ぬ親切だと喜びながら、外へ出た。

後から近所の後家さん達が二三人、足半草履を穿いて附いて来る。其人達の話し合ふ事は、純粹の土地言葉なので、恰も外國人が辯じ合ふ様で、少しも分らない。懸て濱邊の小さな石宮の前に着いた。

一方は斷崖で、一方は荒磯。人里とは全く縁が離れて居る。

「さア此處でお前さん、手を合せてね、目を閉つてね、一心に成つて拜むが好いよ。決して後を向いてはイケねえからね」とお源は教へて呉れた。

「はい……」

從順に登女子は然うして居る、其後から突然、抱着いたのは、お源である。羽搔

締にして、其儘後へ反る。

右と左からは二人で手を取る。一人は前へ廻つて荒縄でギリ／＼と足を縛る。意外の狼藉に登女子は驚いて。

「如何するんです」

「しッ、黙つて……これからがお呪法だアよ。口を利いては駄目だアよ」

「シタバタしなさしな」

「神妙にさッしやいよ」

口々に海女達は呼はつた。

登女子は半信半疑である。呪法とは眞實か。斯うして自分を殺すのでは有まいか。

(一四)

奇習に富む漁村の事だから、實際何を爲るか分つたものではない。矢張這んな手荒い呪法が有るのだらうとも登女子は考へ直して、制せられた儘黙つて居た。其間に後へ廻つて居たお源は、身を引いて横に出た。相變らず二人で左右の手を押へて居る。一人は縛つた足の上に馬乗りになつて居る。どの海女も、髪は赤く、色は黒く、鬼どしか見えぬ。それに今、食はれるのでは無いかとも思はれて成らぬ。押付けられた脊中は、石ころに咬まれて、其痛さと云つたら無い。ごりごり、ごりごり、骨まで削られる様で、舊幕時代の拷問を思はずには居られない。

摺扱けたお源は、誰が如何して持つて居たのか、螺の壺に湛へた物を、零さぬ様に、両手で捧げて寄つて来て。「さア、此御神水を、痛い齒の上に塗るんだから、大きくワツと口を御開きよ」と言つた。如何も併し登女子は、口を開ける氣に成れぬ。「何故開けねえだよ」と言ひながらも、お源自身が、手に持つ物の臭氣に、知らず知らず顔を反けるのである。大概の臭氣なら、殆ど嗅感を失つて居る漁場の人だ。それが鼻を向け得ぬ位だから、よくよく臭いのだらう。そんな物を口に入れられて耐るものかと、登女子は堅く口を結んだ。それと見てお源は、赫として。「えッ、強情だねえ」と罵つた。

「好いから早くおぶツ掛けよ」と一人が叫んだ。
 「ちやア遣付けて呉れべえ」と言ひつゝ、お源は螺の中の液体を、残らず登女子の顔に注ぎ掛けた。

雪の如く白い顔は、紫黒色の液体に染られた。

草を煎じた汁か。果實を腐敗させたのか。それとも魚腸の腐爛したのか。その悪臭といふのは無い。

流石の海女達も手を放して、鼻を摘みながら逃出した。

お源も其儘に逃出した。

後には登女子のみ苦悶して残つた。

悪臭ばかりでは無い。ツン／＼皮膚を刺戟して、其痛さと云つたら無い。

早く顔を洗はうと思つても、海の方角さへ分らない。漸く浪の音で聴き定めて、

其方へ行かうとすると、例の石ころに跪きて、轉んでは膝頭を打つ。起上つては又

轉ぶ。辛うじて浪打端に行き、湖水で悪液は洗ひ落したが、其臭氣は却々に抜け切らぬ。

のみならず顔一面に熱氣を生じ、痛くもあり、痒くもあり、其氣持の悪さと云つたら無い。

其方に氣を取られた所爲でもあらう。齒の痛さは忘れて了つたが、それが果して呪法の爲やら、神様のお蔭やら、如何も怪しい。

登女子は精神さへ朦朧として、稍少時、岩影に倒れて居たが、段々上沙に向つたので、勇氣を起して此處を立上り、よろ／＼として崖前の、お源の家まで立歸つた家に居たのは淺之助で、吃驚して居る。

「まア其顔は……」

それ切、後を言ひ得ない。

「腫れましたか」と登女子は問うた。

「腫れた處では無い、大變だよ」

「そんなに大變ですか」

急いで井戸端で、盥に水鏡をして見ると、全く腫れた處では無い。爛れて今にも潰れさうに見える。

「あつと」思はず登女子は叫んだ。

芝居で累の役はしたが、實際に於てそれ以上の醜さに變つて居る。

(一五)

登女子の顔を這んなにして置きながら、お源等は何處までも呪法の爲で、あの時尋常に口さへ開いて居たら、顔は爛れずに済むのだと言ひ張つて、別に謝罪をするでもなく、平氣で居る。

それ許りなら未だ好いが、瘡へ廻つては口々に。

「なに、あんなに爛れる譯では無いのだが、あれは屹と癩病の筋があるからだ」なと言觸らしもした。

登女子は残念でならぬけれど、今は如何する事も出来ぬ。

醫者に罹らうとすると、いや、それではお呪法が利かなく成るの。神様の罰が當るのなんど、様々に苦情を附けて、如何しても見せて呉れぬ。

淺之助は、それを見兼ねて。

「ではお前、東京へ行つて、療治をして來たら好いだらう」と言つて呉れた。

斯うして容易に解放して呉れるのは、全く氣の毒だと同情して呉れたのか。或は變相を見て、急に厭氣が射したのか。それは疑問だ。

登女子は斯う成ると、顔の爛れを忘れて、嬉しい。それで、少しの旅費を貰つて誰一人、竹杖に縋つて、お源の家を立出でた。

これを見送つたお源は、これから淺之助は自分の物だと云ひ顔で、喜んで居た。噴火小僧の正体を現はした時には、どんなに驚くだらう。

扱ても登女子は、東京へ歸るとしても、海路では懲りて居るので、陸路を熱海へ出て、それから汽車に乗るつもりで、とぼくど道を辿り出した。

毒液が手にも零れ、腿の方にも掛つたので、歩くにも、杖つくにも、どの位難儀だが知れぬのである。

殊に山坂に掛つては、息切れがして、却々に苦しい。その又山坂は熱海まで大小二十何ヶ所も有るといふ。

だが、此苦しみも考へ様である。大賊噴火小僧に貞操を汚されるのから見ると、どの位好いか分らない。

又斯うして醜い顔に成つて居る爲に、女一人の旅が出来るのである。もし餓子を逃げた當座の様だつたら、又色餓鬼に追廻されて、どんな災難に遭はされるか知れ

ぬのだと思ふと、泣く處は少しも無いのである。

峠の細い道で、山稜ぎの男達に出逢ふても、串刺一口掛けるのはなく。皆氣味悪るさうに横を向き、或は唾を吐いて行くのもある。

魚燈坂といふ有名の難所に掛つた時には、登女子は全く弱り切つた。やつどの思ひで登切ると、上は平地で、伊豆の海を一目に見晴しが好い。

其所の岩角に腰を掛けて、先に休んで居る學生が一人、色は黒いが、凛々しい顔だ。

其人には氣の毒だけれど、如何にも息が切れて成らぬので、並びの岩に登女子は腰を掛けた。

何しろ喉がカラ／＼に乾いて、水が飲みたくて耐へられぬけれど、素より山の上で、茶店は無し。如何する事も出来ぬ。

此体を見て居た學生は。

「ヤ、随分苦しい坂だツたね」と話し掛けて呉れた。

「はア……なかく……」と辛うじて登女子は答へた。

「男子の僕でさへ、苦しかツたのだから、女の君では嘸……それに体も悪い様だね」

「實にそれで困りました」

「喉が乾きは仕ないかね」

「どうもカラ〜に乾きまして……」

「然うだらう。僕も弱つたんだ。さアこれでもお上りな」

學生は傍の鞆の中から、蜜柑を二ツ出して呉れた。

何んといふ親切な方だらう！

登女子は神様の様に思つて、其學生の顔を見た。

然うして貰つた蜜柑を寶玉でも有る様に押頂いた。

(一六)

だが、其貰つた蜜柑といふのは、所謂相州物で、皮が厚く、イボ〜が出来て居て、核子もあり、酸味が勝つて、決して上等の味では無い。

それを拵いて登女子が食べた時の美味さといつたら無い。生れて初めて食べる珍味の様に思はれた。

これで咽喉の乾きも治り、気分も大きに恢復して來た。正しく此學生は恩人である。

普通ならば傍の岩に腰を掛けたら、自分が立つて他の岩に行くか。或は叱つて追立てるか。どちらかに出るに極つて居る。それを仕ない上に、親切にも、蜜柑まで呉れるとは、何んといふ優しい心掛だらうと、感激せずには居られなく成つた。

「お蔭で助かりました。此御恩は一生忘れるのでは御在ません」と登女子は真底から誠を言葉にして絞り出した。

「そんなに禮を云はれては、却つて困るね。只ツた二箇の蜜柑だ」と學生は笑つて居る。

「貴郎は之から何方へ……」

「東京へ歸るんだが……君は何方へ……」

何方へと云はれて見ると、登女子は心細い。東京へ歸るには違ひないが、其處には自分の家が有る譯でもなく。斯うなると矢張白田畫伯を便るより他には無いのだ

「矢張東京へ……」と辛うじて答へた。

「然うかね。そんな風で東京まで……いや、熱海まで出るのも骨だらう」

「でも、如何しても然うしなければ成りません」

「氣の毒だなア……や、其邊までまア一緒に行かうぢやアないか。話しながらでも

幾分か歩行が進むだらう」

「御迷惑でも何うか然うお願い致します」

二人は此處を出立した。

道連が出来たので、登女子は大きに氣も引立ち、歩行も進んだ。

話しながら行く間に、此學生は三崎力といふ姓名と分つた。

それで午後四時頃には熱海の町へ出る事が出来た。

三崎は町を見物するからとて入口の處で別れた。

登女子一人になつて歩いて居ると、繪ハガキ屋の前に湯治客か、男女の二人連れが立つて居る。

結構な身の上の方達だと、羨ましさも手傳つて、不圖顔を見ると、男の方は河宮子爵の若殿常美で、女の方は渦邊家の房子姫であつた。

それでは新婚旅行か。

自分が伊東に流されて居る間に、こんな事に或つたのであらう。
 今の此顔の變り方を見られては、どんなに二人共驚かれるか知れぬ。それに往來で話し掛けたら、嘸迷惑もせられるであらうと、身を耻て、登女子は顔を反けつ、行過ぎた。

が、如何かしてお二人に會つて、自分の潔白な事だけでも話して置きたい、何か機會は有るまいかとそれを考へた。

それはそれ。殿方といふものは、本統に宛に成らないもの。あの片瀬の砂濱で常美様は何と云はれたか。

さも〜房子様を厭な様に、然うして自分とでなければ、他の女とは結婚しないもの、様に云はれたのに、此始末は何事ぞ。

迂濶に乗らなかつた自分は賢いが、或る程度まで動かされた自分は、矢張り弱い女であつたと、悔は胸に入つて痛みをさへ感せしめた。

(17)

何方にしても常美様にはお目に掛かりたい。然うしてあの夜からの身の成行に就て語つて置きたい。既う這んな姿に成つた自分に對して、あの熱烈な戀の後談を聴かうとは思はないけれど、數奇なる運命には、多少の同情をして下さるだらうと、登女子は考へた。

それには逆も旅館の表口から名乗つても行かれまいけれども、夜に入つて何とか其所に工風が無いでも有まい。どんな機會が來らぬとも限らないから、責て此夜は熱海で暮したい。房子様に疑はれぬ間に、何處かへ姿を隠しませうと、上り下りの多い熱海の町を、覺束なくも急いで歩いた。

それから宿を先づ取つて置く必用が有るので、成るべく安宿らしいのを探して歩

いて、これならばと思ふ一軒に入つて、一泊を頼んで見た。
宿の者は、つくづく登女子の顔の醜さを見て、鼻を摘まぬばかりにして拒絶した。

又次ぎへ行つて見たが、同じく断られた。

五六軒歩いて見たが、何處でも泊めて呉れぬ。

中には親切なのがあつた。其親切と云つた處で、忠告をして呉れたに過ぎないのである。其忠告——は逆もお前の様な癩病患者は、何處の家だつて泊めて呉れるものではないから、少しも早く熱海の町を去つて、甲州身延山へ登つた方が好いといふのだつた。

顔が美しければ美しいで追廻される。醜ければ醜いで此通り嫌はれる。人間の心の底は残らず見えた様な気がして來た。

世間を冷笑つて遣りたい様な気がして來出した。

妙に圖々しくも成つて、一番上等の宿屋に、無理にも乗込んで見たい様な氣も生じて來た。

忽ち又考へるのは、吾身の素性である。父が非國民として同胞から、その位憎しみを受けて居たか分らないのである。其肉を啖はずんばとまで、愛國者は憤慨したのである。其子としてこれだけの逆境に陥ちてゐるのは、寧ろ當然かも知れないのだ。

泊るに宿がなく、返るに家の無い此身は、今父の罪を殘らず引受けて、天罰の爲に此苦難をするのだらうと考へると、恐ろしさに耐へやらぬ。

「だつて妻がしたんでは無いわ！」と思はず登女子は口走つた。

「父の罪を子が受けるのは、仕方が無いのだらう。父の勳功で安樂に暮して居る子も有るのだから……妻は如何して國賊の子として生れたのだらう。華族の家へは如何して生れて來なかつたのだらう」

これが眞實の悲叫である。

然う斯うして居る間に、日は次第に暮れて来た。

湯の町の春の黄昏、生暖かい風が面を撫で、常ならば心地好いのだが、今はそれ處では無い。

彼方此方を新婚者らしい男女が手を引連れて歩いて居る。

常美と房子との事を思ひ出すと、淡い嫉妬心が起つて来て、又新しく今の身のあ

さましさが覺えられて来る。

又しても、先きの繪ハガキ屋の前まで戻つて見ると、今度は出直してか、常美唯

一人、洋杖をついて此所へ来て居た。

先きの買物に就いて、何か又引返す用が有つたものと見える。店の者と少時話して居た様だが、要領を得たと見えて、總て出て来た。

這んな好い機會が、斯うも容易に來やうとは思ひも寄らなかつた。

登女子の胸は躍り止まぬ。

つい早足に出掛かつて、赫と顔が上氣するのを感じて、嗚呼、今の吾身は片瀬の濱で共に語つた時とは違ふのだと思ふと、涙よりも膿が顔中に逆るのを感じて、躊躇せずには居られない。

(一八)

其所へ、既に常美は洋杖を突きつゝ來掛つた。

道幅の狭い熱海の町、黄昏時ながら接近すれば、電氣の光も射して居る。誰の顔

やら分らぬでも無い。

耻入つて下を向く登女子の顔を、何心なく常美は見つて、その不潔さ醜さに。不快の感を一瞬生じたが、それと同時に、何處やらに見覺わの有る様にも考へられた。

顔は變つて居ても、体つきは異變が無い。縞目は判然見えぬけれど、着て居る物は片瀬の時のと同じなのだ。唯それが潮に入つて、穢れ垢附きて居るに過ぎないのだ。知つた人の目には之も記憶を呼ぶの一ツだ。

不思議に思つて常美は、つい知らず立留つた。それを登女子は既に自分と見當てられたと早合點して。

「常美様！」と思はず聲を掛けた。

「あッお前は……」と常美は吃驚した。

「登女で御在ますわ」

「おう登女……」

言ひ捨て常美は慌しく行過ぎに掛つた。

「常美様、一寸一言申上げたい事が御在ます。御迷惑でも少しの間……」と後を追ひながら、登女子は言ひ入れた。

「實際迷惑だよ。お前の様な女に話掛けられるのは……」と常美はケンもホロ、

「左様で御在ませうが、唯一言……」

「如何も泥棒の手引をして逃走する様な女に、僕の身分として話は出来んよ。實際今直ぐ警官に引渡しても好いだけだ、それだけは慈悲で助けて置く」

「あッ其事で御在ます。全く妾は貴郎方の、お命を助ける爲に……」

「馬鹿な事を云つては困る。僕が何時お前に命を助けられた」

「それを御存じ無いのですから一寸申上げたいと存じまして……」

「いや、既うお前から何んにも聞く必要が無いよ」

「それは貴郎、餘りお情け無いでは御在ませんか」

「蒼蠅いッ」

洋杖は風を切つた。外套の袖は翻つた。登女子は其爛れた頬を弾かれた。「痛ッ！」と叫びながら、餘りの亂暴に、赫となつて、其洋杖に縋りつき。

「何を貴郎は成さるんですか。これが片瀬の砂原で、無理に妾の手を取つて、戀を語つたお方の仕業ですかッ」

「何ッ」

「御身分の有る御方の成され方でせうか」

「えッ身分を想ふから、斯うするのだッ」

常美は洋杖を扱き取つた其拍子に、足を揚げて登女子の横腹を蹴つた。

登女子は地上に打倒れた。

其間に常美は走出して、何處へやら姿を隠して了つた。

登女子は蹴られた横腹も痛み、轉んで打つた膝頭も痛み、少時は起上り得なかつた。

忽ち野次馬は取圍んだ。

「えア女を食ですか」

「癩病患者ですよ」

「如何したんです」

「往來の紳士に強請つたのです」

「そんな者がウロ／＼して居ては湯治客の感情を害して、町の悪評を來しますから

何處かへ追拂つて了ふのですな」

「でも、手を附けるのは穢ないですからな」

「然うですなア」

段々人は集つて来る。グヅ／＼して居ると、どんな目に遭はされるか分らぬので辛いながらも登女子は立上つた。

(一九)

漸く登女子は、包圍して居る群集を突退けて、暗い横町に駆入つて、如何やら斯うやら身を隠した。

既う汽車は翌日でなければ出ない。

線路を傳うて夜道を小田原へ出るには、餘りに疲勞して居る。然ればとて、宿は何處でも泊めては呉れない。

此上は、野宿をするより他に分別は出て來ない。

最初猿田の宮で寝た事もあつた。それから鹿嶋半嶋を夜通し走つた事もあつた。

その様な恐しい危い目には既う遭ふまいと思つて居たのに、今度又それを再び爲るに至つた。

何處か好い場所を選ばねば成らぬ。

時候も前より暖く成つて居る。又土地の名からして熱海であるから、野宿するには都合が好いが、困つた事には、其寝るべき場所が無い。

町と云つても海を前に、山を背にして居るので、空地に乏しい。段々に成つて居るそれを上へ上へと登つて行くと、町家は離れるが、別荘が澤山並んで居て、飼犬など吠立て、逆も落付いては居られない。

彼方此方どうろくして居る間に、漸く山田の今は打捨てある處へ出た。近く又別荘でも建つのだらう。

其所には古い稻葉の束が、塚の様に積捨てある。

先づ此所が好からうと、辛うじて選定して、稻葉の束に腰を掛けて一息して居ると、海には漁火が星の様に見える。

下の町の燈火は又漁火の様に見える。其方から三味線の音も聴えて來る。西洋樂

器の音も聴えて来る。按摩の笛の音も、拍子木の音も、ざわ／＼と人の聲の集合したのも。

登女子は其聲の中に常美の叱しる聲。房子の嘲る聲。それが混じて居る様に思はれるのである。

どの燈火が、二人の宿か。

いづれ今頃は此方の話で持切つて居られるであらう。

何處までも自分を泥棒の手引として、悪人扱ひにされて居るだらう、如何かして其明りだけは立てたいものだと思つて居る處へ、誰やら又一人、此方へ来るらしい。

何者か知れぬけれど、此所に居るのを知られては具合が悪いと、密と稻塚の蔭に身を隠した。

暗いので何者だか、来た人は分らない。

これも如何やら野宿する者らしい。稻藁の束を手探りにして、それに腰を掛けたのが分つた。

透して見ると、餘り大きな人では無い様だ。

乞食だらうか。

登女子は心配して居た。

彼方では先客有りど知らぬので。

「行暮れて木の下蔭を宿とせば……か……風流も併し寒いもんだぞ」と獨語した。

其聲は如何やら聴覚えがある。

「もし／＼」と登女子から聲を掛けた。

向ふでは吃驚して。

「あッ其所に誰か居るんですか」

「貴郎は今日お連に成つた、三崎さんでは有りませんか」

「あッ、登女子さんか」

「如何して貴郎は此所へ……」

「駄目だね。贅澤な湯治客ばかり相手にしてゐる宿屋では、無銭旅行に均しい學生を泊めるのを、喜ばないのでね。や、それも頭でも下げて頼んだら、泊めて呉れるかも知れないが。なに、今夜一晩の事だからね、野宿の方が好いと思つて、此所へ來んだよ」

「左様ですか……」

「君は又如何したので……」

「這んな顔をして居ますから、何處でも泊めて呉れませんので……」

「それは如何も酷いなア」

三崎力は憤慨した。

(110)

「漸く此處を見附けて、翌日の朝まで居るつもりで、薬束で寢床でも拵へ様と考へて居た處へ、貴郎が入らッしやツたのです」と登女子は説明した。

「誰が野宿しやうとしても、恰度此邊まで來なければ成らない様な道の順序に成つて居るんだらう。お互ひに熱海の土地から排斥されて此處まで來たんだ。何しろ。寢る準備を仕ようね。薬は澤山有るんだから」と三崎力は言ひながら、早稻薬の束を取つて、地に敷き、又上に掛ける様にもした。

登女子も同じく其通りにした。

「さア斯うして寢床が出來たら、既う安心だ。星が出て居るし、雨の降る様な事は有るまい。却つて宿屋の狭い室で虐待されるより、此方がどの位氣樂だか分らな

い」と力は身を藁に藻潜らして、顔だけ出して然う云つた。

「然うですなえ」と登女子も藁を掛けながら答へた。

「時に、晩の食事は如何して？」

「あッ……然うでしたね」

登女子は食事處では無かつた、總てを忘れて今まで居た。併し腹は空いて居たのだ。覺わずに居たのが急に減つたのを感じて來た。

「や、僕は蕎麥屋に入つて腹を拵へて來たが。もし夜中に腹が空るとイケないと思つて、ジャム入りのパンを買つて持つて居る。お前、未だ食べないのなら。上げ様」と相變らず親切である。

「然うですか。では一ツ頂戴しませう」

寝ながら手を出した。

向ふからも寝ながら手を出した。

それで遠く距離に寝て居るのだが、暗いから直ぐには取れなかつた。

登女子は、これで二度力から救はれた。渴したのと、餓えたのと。

嬉しさは身に沁みて覺えられるのである。

「や、僕も身に覺えが有るがね、旅で腹が空つた時程、心細い事は無い。僕はね、郷里は甲州なんだがね、初めて東京へ出る時に、一文無しでね、それは随分難儀をしたよ」と力は語り出した。

「甲州から一文無しで……」

「家庭が面白く無いのでね、阿父さんが本統ので無いもんだから……自然に僕はね冷遇せられるのでね……で、東京の叔父さんを使つて上京したのさ」

「まア、然うですか……」

「その時途中で、旅人に出會つて焼いた握米飯を一つ貰つて食べた時の嬉しさは、未だに忘れないからね。いや、そんな事を云つて、僕は君に忘れて呉れるなど、恩

を強入る譯では無いんだよ」

「決して然うは思ひませんわ。御自分が苦しんだので、それで同情がお深いのだと思ひますわ」

「然う思つて貰へれば好いのさ。それでね、僕は今、叔父さんの處に厄介に成つて居るのでね」

「左様ですか……」

「叔父さんは有名な洋畫家なんだよ」

「えッ有名な洋畫家？」

「北谷進と云つて。先づ知らない人は無いのさ」

「あッその御方なら妾も存じて居ります」

「名前を知つて居らうね」

「い、え、御名前ばかりでは有りません。お目に掛つた事が御在ますの。近頃信州

の方へ御旅行で御在ませう」

「あッ既う、歸つて居られるが、如何してそれを君は知つて居るの」
三崎力は不審に思つた。

(111)

登女子の方では三崎力が、北谷畫伯の甥と知れて、其奇遇に驚きながら。

「實は妾、白田さんの處に居りましたので、それで北谷先生の事は存じて居りますの」と打明けた。

「わッ、それでは、あの、白田さんの處に君は居たッて……」と力も奇遇に驚いた。

「然うで御在ますの」

「それは實に小説的だなア」

「不思議な御縁で御在ますねえ」

「それでは若しや、ボン倶楽部の寫生會に、モデルに成りに行かなくッて？」

「行きました」

「あッそれでは評判の美……そんな顔に如何して成つたの」

「それでは委しく妾の、這んなに成りましたとお話を致しませう」

登女子は渦邊家に侍女として入つた事、其腰越の別荘から、賊の爲に引き出され小船で相模灘に漂うた末、手石嶋に流れ着き、それから伊東の漁女の家に入居た事。漁女に顔を潰された事まで残らず話した。

三崎力は非常に同情して呉れた。

「や、然ういふ事なら猶の事。東京と一緒に歸りませう。旅費は有るですか」と力は益々親切に言つて呉れた。

「汽車代位は持つて居ります……いづれ、東京へ歸りましたら……他に行く處も有

りませんから、矢張白田先生の處へ參らうと思ひますが……又北谷先生にも、是非伺ひたい事が御在ますので……妾の親に就いて、何かお話が有りますとかで、いづれお目に掛るお約束をした儘、お別れしたので御在ました」

「夫は是非訪ねて入らッしやい」

何彼と話し合つて居る間に、夜も次第に更けた。寒さも少しは覺えて來たので、つい、どちらか薬を引冠つて、眠りに入つた。

明くる朝は。一番汽車に乗つて、小田原に出で、それから其處で食事をして、更に電車に乗り、國府津に出で、汽車で又東京に入つた。

新橋で登女子は力にわかれて、一人で電車に乗つて、市ヶ谷田町に歸り着いた。途中も随分極りが悪かつた。が、いよゝ白田畫伯の門前まで掛ると、益々恥しい。

だが又、畫伯夫婦から優しく慰めて貰へるのを思ふと、嬉しからぬでも無い。

格子戸の處まで来ると、折しも中から外出の畫伯。何心なくガラリと戸を開くや忽ち登女子の立つのを見て。

「イカン、乞食なんか、無間に入つて来ても駄目々々。文士と畫家の家へは物貰ひが来ても損が行くぞ」と罵つた。

乞食と間違へられたのも無理はない。

「先生、妾で御在ます」

「妾？とは誰か」

「登女で御在ます」

「あッ登女？乞食かと思つたら泥棒だつたのか」

「まア先生、そんな事を仰有らずに、妾の申し上げるのを一通り聴いて下さいまし」

「や、どうも辨解の餘地が無からうと思ふ。併し言ふなら早く言へ、簡単に、簡単に……」

中から辨子夫人の聲で。

「登女さんが歸つて来たのなら、兎も角も中へ入れたら好いでせう。外では話が出来ませんから……」

「いや、それが逆も中へは入れられないのでね。大變なんです。其顔と云つたらないので……」と畫伯は厭な顔。

「どんな顔に登女さんが成つたんです」と言ひつゝ、辨子夫人も出て来て見て。

「おやア！」

その驚きは無理では無いと思つた。

併し、それが前の様に美しかつたら、これ程までに畫伯も冷酷では有るまいに。

鹿嶋から土浦まで追廻した時とは、別人の様だど、これにも人の勝手過ぎるのを見るを得て、登女子は腹の中で冷笑を沸かさずには居られなかつた。

(1111)

辨子夫人はいくら気が強くツても矢張女性としての優しさがある。

「まア何んにしても其所では仕様が有りませんから、此方へ上げて話したら好いでせう」と宥めに掛かつた。

夫人には能く従ふ白田書伯。

「それでは、まア、上るが好い」と不承無性に然う云つたが、それでも氣味悪さうな顔をして見て居つた。

登女子は兎も角も茶の間に通つた。

早速夫人は辨じ出した。

「お前さんの方にも種々話す事が有りませうが、妾の方にも亦話す事が有ります。

夫は渦邊子爵家から嚴しく掛合が來て居るのです。何んだツてあんな恐しい女中を世話したか、泥棒の手引をするとは實に怪しからんといふのです。三太夫が却々分らず屋で、非常な見幕で談判に來たので、家の先生は恐縮して、一言も口が利けない程でした。妾がまア代つて言譯はして置きましたかね」とノベツに喋り續けるので、此方から言葉の挟み様が無い。

漸く無理に登女子は口を入れて。

「それは皆誤解で御在ますの。いろ／＼其所に譯が御在まして……」と言ひ掛けた。

「まアお待ちなさい。未だ言ふ事が有るんです。嚴談を持込まれたのは、渦邊家はかりでは有りません。他にも一口あります」

「えッ、俺から……」

「都合二軒から喧しく掛合はれて居るので、實に當家では困つて居るんです」

「そ、それは、何處で御在ますか」

「それは銚子のお前さんの舊主人からです」

「え、えッ」

登女子はこれには吃驚した。此一言で持命の幾分が縮んだ様に考へられた。

「まア黙つてお聞き。扱て如何も意外な方面から秘密の洩れるもので、あの發狂した近間さんね、あの人が少し快く成つたので、退院された處が、直と汽車で銚子へ飛んで行つて了つてね」

「あッ銚子へ……」

「お登女の居る處は、これくだから教へてやる。其代り俺の妻に呉れる、といふそんな談判を開いたんです。未だ全快しないのですね」

「まア……」

「先方では早速人を家へ寄越して、是非登女子を返して呉れッて、もうく毎日のように厳しい談判なんです。居るのなら仕方ないが、居ない者を還せといふので、

どの位妾の方では困つて居るか知れませんが

聴く事毎に登女子は驚いた。

「どうも、何處まで此方へ御心配を掛けるか知れませんがね。實に何んとお説して好いか分りません……ですが……まア妾の方の話も、一通りお聞き下さいまし」

「さア今度は聴きませう。全体登女さんは、如何して夜逃げをしたのですか」

登女子は此所で河宮常美の戀慕の事から、片瀬の砂山の話、それから其夜噴火小僧が忍び入つた事、流された事、伊東の事、顔の變つた原因まで残らず打明けた。これを聞いた書伯夫婦は事の意外に驚き、且つ少からず同情した。

「あッそれでは却つて登女さんが御後室其他の生命を救うたのですね。身を犠牲にして渦邊家の爲に盡したのに、アベコベに泥棒の手引だなんて云はれて、這んな詰らない事はありませんね。妾の方だッて詰りません。これは其事實を言ひ立て渦邊家の方から謝罪させなければ、此間中苦しめられた腹が癒へません。良人談判に行

つて入らウしやい」と夫人は書伯に説いた。

「や、僕は如何も、然ういふ談判は下手だよ」と書伯は尻入みした。

「そ、そんな意久地の無い事があるもんですか」

「いや、何んど云はれても、僕は駄目だよ」

「そんなら妾が行つて来ませう」

新しく云へば女權擴張者。古い處では之を懸天下といふ。

(1111)

白田夫人辨子は、凄じい勢ひで渦邊家へ乗込んで行つて、應接間で禿頭の三太夫と相對した。

「今日伺ひましたのは、先日来、御心配を掛けました登女子の事に就て、御在ます。

此間中は此方に何の材料も持つて居りませんでしたから、何と辯解の致し様も御在りませんでした、幸ひに登女子が宅へ歸つて参りましたので……」と辨子は口を切つた。

「あ、泥棒の手引をした者が、歸つて来ましたかい」と三太夫は冷笑の態度である。

「それが大變な間違ひでした、實は此方の御後室様や又河宮の若殿の御一命を、お救ひ申した譯で御在まして……」

「えッ！」

「事實は斯うで御在ます」

辨子は登女子から聞いた以上に、話を誇大にして、形容を附けたり、表情で示したり、噴火小僧脅迫の條を残らず語つて。

「然ういふ譯ですから、御當家からは、一ツも苦情を持たまれる因縁は御在ません。

と云つて、何も今日上りましたのは、お禮を頂かうの何んのだ、そんな賤しい考へではありませんのです。つまり登女子の潔白が御當家にお分りに成り、又妾達の方が無責任に、泥棒の手引する様な女をお世話したので無い事さへお分りに成れば、それで宜しいので御在ます。ハイ全く考へ違ひであつた。貴郎方に苦情を持たんだのが良くなかつたど、衷心から悔悟して下されば、それで手前供は満足致すので御在ます」と抉る様な言方で責附けた。

三太夫は鼻の頭に汗を浮かばせながら。

「や、それが事實に致しますれば、それはハヤ實に飛んだ如何も……や、これは實に、河んでして、寔に以て御氣の毒な、甚が相濟まない様な譯でして」とシドロ、モドロ。

「事實とすれば何もありません、其の通りなのです。もしお疑ひなさるのなら、或る程度までは河宮の若殿常美さんとか、御存じの筈です。片瀬の砂原で登女子と

長く話して居らッしやツたのは、お覺へのある筈です。其時、風体の怪しい者が附近に居た事を、御存じか、御存じないか、それも御問合せなれば宜しい。又その……」

此上論じ出されては、留度があるまいと三太夫は降参して。

「まア一寸お待ちを願ひます、如何か一寸……此事をお上へ申上げますで……へは幸ひ御後室にも、腰越からお歸りに成つて居りますので……」と言ひながら、早や中腰である。

「御後室が御歸りに成つて居らッしやるのなら、猶更の事です。そんな悪い事をする様な登女子か登女子で無いか、大概お分りに成つて居さうなもんですツて……」

辨子が滔々と述べて居る間には、早や三太夫はお奥の方へ駆込んで居た。

辨子は勝誇つて、痛快を覺えた。だが、今まで三太夫から責められて居るので、未だ言ひ足りない様な氣がして居る處へ、三太夫が急々として出て来た。

盆の上に、水引を掛けた紙包を持つて来た。それは後室から登女子へ下さるといふ——名目は唯、時服の代といふのであるが、實は犠牲に成つて命を救つて呉れた禮の心。些少なから三百圓といふ事。

取るの取らぬので種々押問答をした。

が、當人の心が分らない。登女子は如何するか、辨子には極められぬので、兎に角預つて行くといふのでそれを受取り、渦邊家を立出でた。

これだけあれば登女子は立派な衣裳が出来る。指環も買へるなど考へつゝ、辨子はニコ／＼して、自分の手腕、否、口辨を誇り顔に歸つて見ると、留守は留守で、大事伴が持上つて居る。

白田書伯、玄關先で、困り切つて居る處で

それは銚子の方からの談判が益々激しく成つて、今日は遊人の親分らしいのが、尻を捲らぬばかりにして、掛合に來て居る。

「さア如何しておくんなさるんで。冗談ぢやアありませんせ。他の者ならいざ知らず。あつしも飯岡の助五郎の血を引いた蛇園の權次でさア。今までの様な辨解を聴いて、左様で御在ますかと歸るんぢやアありません。一体何處へ登女子をお隠しなすつたので……」

(二四)

蛇園の權次に捻込まれたので、白田書伯は青く成つて居る。何んとか言へば好いのに、唯まご／＼して居るので、益々彼から疑はれる様に成る。

辨子夫人は、つく／＼感じた。人の家に談判に行くのは餘り好いものでは無い。

今、自分が、渦邊家へ行つて、大いに氣焔を吐いて來たところだ。それから歸つて見ると、因果應報で、自分の家へ既に強談判が來て居る。高聲で論じ出すのは好も

のでは無いと、そんな風にも考へつゝ、先づ良人を救ふべく玄關へ乗り出した。
書伯はホッと息を吐いて。

「好い處へ歸つて来て呉れた。有難いです。感謝するです」

女房に頭を下げる圖なんて、餘り好いものではない。

其所でいよゝ、蛇園の權次對辨子夫人の論戦と成つた。

「ねえ奥さん、いくらお隠しなさつても駄目です。あッしは裏口でね、先生と登女子と話して居るのを、聞いたのでさア、え、聲を聞いたんですから駄目ですよ」

「えッ聲？」

「然うです」

「ちやア未だ顔は見ないのだね」

「顔は見なくつても、あッしは聲に覺えがあるんですア」

「それでは仕方がありません。兎も角も當人を出して逢はせませう」

「それア然う來なくつちやア成らねえ事で……」
書伯は心配して。

「そ、そんな事をして……好いのか、好いのか」と小聲で問ふた。

「好いのですよ。仕方が無いちやア有ませんか」と辨子は言ひつゝ、奥に入つた。

登女子は、いつそやの例で、矢張押入の中に隠れて居た。

「好いからお出なさい。妾にも考へがあるんです」と辨子は言ひつゝ、顔を上げて居る登女子の手を取つて引出した。

登女子は夫人を信じて居るので、恐怖心を持ちながらも、後に附いて玄關へ出た。蛇園の權次は、登女子を見ても、餘りに顔が變つて居るので、それとは心づかず。

「さア奥さん、早く登女子を出して下さい。あッしは氣が短いのだから、グツツして居るのは大嫌ひだ」

「あら、此處へ連れて來て居るのに」

「えッ」

「これが登女子ですよ」

「えッ、これが登女子？」

権次が膽を潰したのす道理である。花の如く美しくかつた登女子の顔は、今の南瓜の皮の如く醜く成つて居る。

「これが登女子です、確かに登女子です」と辨子は、すつと落着いて出た。

「こ、これは如何した譯で……全然化物ぢやアありませんか」

「實に登女子は不憫です。醫者に見て貰つた處が、これは遺傳で、つまり癩病ださうです」

「えッ、癩病？」

「益々顔が、くづれるばかり。今に頭の変も抜け、鼻も落ち、手足の指も失くなるでせう」

「ほ、ほんとうですかい」

「嘘だつたら此の子も幸ひですが……實に不憫なものです」と辨子は、空泣きをして見せた。

「癩病ぢやア如何も仕ようがねね」と権次は大いにシヨゲた。

此機に乗じて辨子は膝をすゝめ。追撃戦に轉じて。

「這んなに成つて居る登女子を連れて歸つて、一体、お前さんの方では、如何するつもりですか」と問を發した。

「そ、それは、如何もね、あッしには分りませんがね、癩病患者を連れて行たッて親方も喜びはしますめえ。役者には勿論、娼妓にだッて、させられませんからね」と権次は甚だ振はない。

(二五)

蛇園の權次が登女子の顔を見て悄氣たのに附入つて、辨子夫人は更に又。

「だが、いづれお前さんの方では今までの意氣張り上、癪病患者の登女子を銚子へ連れて行つて、すね、役者にも娼妓にも、亦女中にも出来なくつても、逃亡した者の末は這んな者だといふ見せしめの爲に、いづれ大勢の前で惨酷な事をして見せるでせう」と言出した。

「わ、ま、そ、そんな事で……」と權次は勢ひ然うでも答へねば成らなかつた。

「ちやア如何しても連れて行きますね」と念を押しに言掛けた。

「ま、それは、その何んでして……まア、その、時と場合でね」と逃げを張るのを忘れない。

「では、穴勝、是非連れて行かなければ成らないといふ譯でも無いのですね」

「まア、その、癪病と極つた者をねえ、連れて歸つて折檻して見せた處でね……」

「妾の方も、折檻されると知れては可哀さうで、手放して遣られません。遣るとしても警察の方へ、相當の注意を與へる事は勿論です」

「そんな事に成ると、實際面倒ですから、親方だつて喜びは致しませんや」

「其處で妾の方もですわ、縁有つて一度世話をし掛けた女ですから、満更見捨てる譯にも行きません。實は田無の癪病院へ入れるつもりで、知つた人から寄附をあふいで、少々金は集まつて居ます。如何でせう、それを一時立替へて、登女子さんの身請を仕ようちやアありません」

「えッ身請を？」

「お前さんも蛇園の權次と云つて名前を賣つてる方だとすれば、素手で歸るのも極りが悪いでせうから……まア身請の金を持つて引取つたら好いでせう」

「其奴は如何も難有い……」

「だが、登女子が、健康で、美しかった時の相場では、お話に成りませんよ」

「なる程……」

「癪病患者に成つてからの相場ですよ」

「なる程ね……」

「癪病患者の身請なら、其方から幾干か附けて呉れるのが本来ですが、然うも行かないでせうから……先づ十圓位も出させうか」

「十圓は酷い」

「それなら當人を引取りますか」

「まア、その……時と場合でね……」

「妾の方は十圓出すのも、此後登女子の身の上に關しては、一切掛り合はないといふ一札が欲しいばかりなんです。それ以上は出されません」

「だつて如何も十圓は酷ふがさア……ま、いづれ一度銚子へ電話を掛けて、親方も相談の上で……出直して参りますよ」

蛇園の權次も辨子夫人には敵し得ない。狐鼠々々と引下つた。後で白田畫伯は心配して。

「十圓なんて、今、そんな金は……」と言ふのを打消して。

「大丈夫ですよ、三百圓まで出せますよ」と夫人は渦邊家の今日の模様を報告した。登女子は疑ひの晴れたのを喜んだが、畫伯又三百圓の入金に満面笑を湛へて。

「それア無論問題に成らん。三百圓呉れるといふのだ。取ツどけ〜」

★ ★ ★ ★ ★
明くる日、蛇園の權次は再び來た。
又夫人と一談判有つた後、結局五十圓で銚子の方と關係を絶つたとふ事に成り、

向ふから一札を入れて引取つた。
これで全く登女子は、囚はれから脱した。今まで鐵の鎖で繋がれて居た様な氣で居たのが、すつかり取去られた心持。
いや、併し、一方はそれで落着いたが、未だ一方には執念深い噴火小僧の居る事だ。何時彼が現はれて来て、難題を言出すか分らぬと思ふと、全く安心する事は出来ないのである。

畫伯夫婦は、先づ醫者に登女子を見せた。
なに、何んでも無い。カブレの一種だから、其内全治するといふ見立。

(二一六)

蝦蟇の背の如く醜かつた登女子の顔及び手の甲、腿の一部など、醫者の手宛で大

分良く成つて来た。

猶此上は温泉に行つたら好からうといふので、行通の比較的便利な箱根芦の湯に行く事に定めた。

金は三百圓の内から五十圓引いたのが、そっくりして居るのだから、どんなに長くても滞在して居られるのである。

それで同行者として辨子夫人が一緒に行つた。
松坂屋といふのに宿を定め、此所に二日ばかり辨子は遊んで居たが、畫伯の留守

番が信用されぬので、いづれ又迎へには畫伯と二人連で來るといふて置いて、いそ歸京した。

後に登女子は唯一人と成つた。
夏場と違つて春の芦の湯は、土地が山上で寒いので客が少い。登女子は併し此方が好いと思つた。

湯の利目も著しく、一週間居る間に顔の方は元の如く癒つて、何の痕跡も留めぬのみか磨上げた玉の如く、一層前より美しく成つたが、腿の方が未だ少し癒えないので、既う一週間も居る事にした。

だが退屈で、くさくさした。退屈で困るなんといふ事は今までに無い経験である。従つて何彼にと身の上に既て考へずには居られない。

幸ひ同じ三階に、一人の女客が居るので、此人と交際して、訪ひつ訪はれつして居た。

其女客は、既う四十近いのだが、却々美しい。然うして化粧が巧なので、若く若く見えるのである。

只の人では無いと思つて居た。

先方では初めの間は身分を隠して居たが、後には到頭名乗を揚げた。

これは有名な女優——殆ど女優の元祖と云つても好い人で、唐見笹江其人であつ

た。

「少しね、興行上の事で、妾は姿を隠して居なければ成らない事が有るんですからそれで寒いのに、此芦の湯へ来て居るんですが、どうか此事は人に言わないで居て下さいよ。宿の者にも知らせないで居るんですから……」と笹江は口留をした。

「い、え、妾は決して申しません。唯、妾にだけお打明け下さつたのを、嬉しく思つて居りますわ」と登女子は言つて置いた。

向ふが然う打明けて呉れたので、今度は又登女子も自分の身の上を語らなければ成らない様に考へられて、格別差支の無い程度に於て、語り出した。

銚子の事は既う分つても大丈夫なので、實は自分も田舎廻りの女優で有つたといふ事から、逃亡した間の艱難辛苦から、渦邊家の事、又伊東の事、一通りは物語つた。

「まあ薄命な方ですねえ。本統に同情しますわ。妾も随分苦勞しては來ましたが、

今では幾分か幸福です。それも藝術に身を委ねたからです。如何ですか、貴女も東京の本舞臺で、女優に成つて賣出して見たら」と笹江は勧めて呉れた。

「逆も妾の様な者が……田舎ならば兎も角も」と登女子は謙遜した。

「なアに、貴女程の……失禮ですが、貴女程の美しい顔を持つて居らつしやれば、屹と成功しますよ。今、東京で評判の女優達、一々洗つて見ると、随分怪しいんですからね。別して新しい芝居の女優と來ては、實際素人も素人、お話に成らないんです。其又素人臭いのが好いんです……馬鹿々々しい世の中ですわ」と説き立てた。

(二七)

女優と成つて一生を送らうか如何しやう。それに就て登女子は、どの位考へたか

知れない。

いつまでも白田書伯の處へ世話に成つても居られないのだ。又奉公に出るとしても、渦邊家で既に懲りて居る。

と云つて、モデル女に成るのも餘り感心しない。

女の獨立して行く職業としては、女優は最も好いかも知れぬと、大分考へがそれに傾いた。

それは併し笹江の話の光明な側だけ聽いて動かされたので、暗黒面に就ては少しも知らぬのである。

銚子の開新一座での経験は有るけれど、それは如何も東京の本舞臺の標準には立たぬ。

寶石入の指環。白金の腕時計。三越白木の晴衣裳。自働車の送迎。各所の招待會。輝き光る方面のみが目の前に展開して來る。

外國の女優何某が、一年の収入の莫大な話や、其權威の強力な事や、それが世界的生命である事や。種々笹江から聴かされて見ると、つい自分も其様にといふ氣が、起らないでも無い。

日本の女優の現在の位地は、未だ却々其處までは至らないけれど、それでも笹江が初めて打つて出た時よりは、社會からも認められて來て居る。これから益々位地は高まるばかりである。既う數年もすれば、新しく出るのに却々骨が折れるが、今の様なドサクサ紛れに出て置けば、非常に徳である。初舞臺から第一流の女優として賣出して置くに、先きへ行つてから大變に樂が出来る。就ては最初から花々しく打つて出る様に、運動其他は抜目なく引受けるなど、笹江の説くのは美味い事だらけである。

「いろ／＼考へて見ましたが、如何か妾も、貴女の御引立てで、女優に成つて見たいと思ひますから、何分宜しくお願ひ致します」と登女子が口を切つたのは、話があ

つた明くる日であつた。

笹江は、待つて居たと云はぬ許りの笑顔で受けて。

「然うなさいよ。それが貴女に取つて一番好い航路ですわ。及ばすながら妾も力の盡せるだけ盡くしませう。ですが、此處に一ツ條件がありますよ」と言ひ出した。

「條件と申しますと……」

「貴女がいよ／＼女優と成つて出るとすれば、屹と當るに相違ありません。いえ、これは妾の見越しなんです。から、給料も奮發します。今度の興行は妾の手芝居で萬事私が仕切つて、舞臺の内外をやるんですからね。今が今でも千圓の金を貴女に上げて好いんですが……其つもりで萬事、手配りした處で、急に何處からか苦情が入るとか、或は貴女の氣が變るかして、止すなんて言ひ出されると、困りますよ」

「そんな事は有りません」

「それが今は無いつもりでも、萬一後にあらはれては妾は非常な打撃を受けますので

す。興行上の策略として、貴女を賣物にして、あらゆる廣告手段を取ります。それで人氣を集中した處で、ポツカリ出勤を断られたと成ると、既う後は駄目です。初めからそんな話が無いのなら、未だ好いのですが、景氣を附けた上は、何處までも其人が出ないと、仕様が無いんですからね」

「決して貴女に御迷惑を掛ける様な事は致しません」

「よろしい。それだけ分つて下されば、妾も一生懸命に成りますよ」

いよく登女子は笹江と堅き契約して、女優となる事に極めて了つた。

それで一通り白田夫婦にも相談、といふよりは、屈けて置く必用を生じたので、夫婦の迎へに来るのを待たず、箱根山を降り、湯本で土産物を求めて、急いで歸京した。

(二八)

挽物細工に鹽辛類、土産に持つて登女子は白田の家へ歸つた。

夫婦は不意に歸つて來たので吃驚して、何か異變でもあつたのかと心配した。

登女子は、唐見笹江と懇意に成つた事から、女優に成ると決心した事を話して、

其賛成を二人に得たいと申出でた。

白田書伯は大不賛成で。

「それア實に詰らない。女優に成る位なら、高等淫賣に成つた方が未だ好い。藝術家の假面を冠つて、つまり巧みに淫を講ぐのだ。不都合です。いや初めはそんな考へで無くツても、何時の間にかそんな事に成つて了ふのです。比較的教育的のある然うして眞摯の態度を看板にして居る新劇でも、女優は監督者や作者の玩弄物にな

つて、孕んだり、墮胎したり、逃亡したり、後には泥棒をしたり、詐欺をしたり、其末路は悲惨です。況んや不評判の新派劇の仲間に入るなんて、絶体に駄目です。それは笹江に登女さんは悉皆誑されて了つたのだ。つまり芝居者の餌食にされたに他ならないのです」と眞赤に成つて論じ出した。

辨子夫人も之に賛同されては大變だと登女子は思つたが、意外にも夫人は畫伯の説を駁して。

「それは貴郎、悪い例ばかり見て居らつしやるからですよ。女優だつて中には立派なものも有りますわ。いえ、譬へ現在の女優が悉く墮落して居るとしても、登女子さんは其悪弊を破る爲に眞の藝術家たる態度を取つて、世に模範を示せば好いちやア有りませんか。妾は賛成ですわ」と言ひ出した。

「それが誰だつて皆最初は其意氣組で飛込むだけけれど、木乃伊取が木乃伊に成るの格で、中へ入つて見ると同化されて然う行かなく成るんだよ」

「そんな意志の弱い登女子さんでは有りません。必ず初一念を貫き得る人です」

「辨さんは、それを保證しますか」

「え、仕ますども」

「これは面白い、然らば此所で確實に其保證をお仕なさい」

「確實に保證と云つて、如何したら好いのですか。金子でも借りた様に證文を入れるのですか」

夫婦喧嘩が始まりさうなので、登女子は二人の間に立ち、双方を先づ宥めて置いて。

「妾の事でそんなに御心配下さるのは、どの位嬉しいか知れませんが……實は既う、妾、笹江さんと堅い契約をして了つたのです。今と成つては如何しても止す事が出来なく成つて居りますの……ですから、如何かまア、女優に成る者として、此上の御力添を願ひます。其代り、妾は、何處までも身を慎みまして、人から後指

をさされる様な事は致しますまいですから……」
話が段々分つて来た。

「なに、畫伯とても、女優を思ひ止らせる様に云つたのは、何時までも自分の家に置いて、時にはモデルにでも仕たいからであつた。内心は絶体に女優不賛成でもなかつたのだ。」

「や、いよゝゝ女優に成ると極まれば、決して打棄つては置かない。出来るだけの應援もするです。畫家仲間を集めて總見をして、花を贈る。又新聞社の方にも知つた人が多から、それゝ紹介して、好意を持って貰ふ様に仕ませう」と畫伯は打解けた。

「妾は自分の妹が女優になる様な氣がします。樂屋へ世話を焼に行きますよ」と夫人は乗切つて居る。

二三日すると笹江も歸京した。

それで其の芝神明町の住居に登女子は引取られた。

いよゝゝ運動は開始された。

三越に眺へた衣裳だけでも、三組であつた。

指環、時計、頭の物、ケバゝしい物ではあるが、いづれも高價なのを取揃へた。

笹江は盛装した登女子を連れて、利目々々へ挨拶に自動車で廻り出した。

それから顔つなぎに新聞社の方達をも、招待した。

新橋花月の宴會だけでも、數晩つゝいた。

登女子の評判は、未だ舞臺に出ぬ前から高まつた。

(二九)

いよゝゝ登女子は笹江の一座に入り、女優と成つて劇壇に打つて出た。

新富座の興行で、一番目は翻案劇「煙」五幕。それに喜劇として「花の旅」といふのが二幕添えてある。

登女子は「煙」で夢野伯爵令嬢露子といふのを勤め「花の旅」では、踊子のお花といふのを勤めるのだ。

露子の役は、繼母の伯爵夫人が亂行に、幾度か諫めて用ゐられず。却つて其奸計に陥つて、不義の汚名を着せられたのを憤慨して、夫人の情夫を拳銃で撃殺し、自分もそれで自殺して果るといふ悲劇の女主人公である。

お花と云ふ方は、極めて軽いので、仕出し同然の花見客の一人だが、それでも、吉野山の花の下で、踊りを見せる處があつて、氣の好い役である。

初日が開くまでには登女子、どの位心配したか知れぬ。もし不評であつたら、笹江に對して氣の毒でもあるが、又白田畫伯夫婦にも面目無いと、固く成つた氣味であつたが、案じるよりも容易で、二役とも大喝采。

笹江はわざ／＼舞臺裏に待構へて居て、飛着く様に登女子を抱き。

「まア本統に好い出来です。妾の後を繼いで呉れる者は、登女さんより他には有りません」と言つて賞めて呉れた。

畫伯夫婦も樂屋へ飛んで來て。

「大成功！大成功！」

「本統に、まア、大成功ですよ」

「あの見物の喝采は如何です」

「妾の近所に居た人達は、皆な半巾を目に宛て、泣いて居ました」

「僕も實際泣かされた」

狂喜といふのが之であらう。夫人はそれが當然だが、反對した畫伯が此様は甚だ可笑しい。

登女子は、やツと安心出來た。

新聞の評でも筆を揃へて、皆登女子を賞賛した。
だが、前の悲劇の方は素人の見物が感心する様には無い。却つて喜劇の踊の娘の方を賞めるのが多かつた。

新派の女優で、あれだけ踊れるのは珍しいといふのが輿論であつた。

「え、登女子といふのは、實際は笹江の生んだ子なんですが、都合で今まで隠してあつたのです。それ。有名な公爵の、御落胤でさア。公爵の存命中は、充分お手当があつたのでしたが、公爵もあんな事に成られたので、其でまア、ミツチリ藝を仕込んでね、それで此頃に成つて初めて舞臺へ出したんです。ですから踊でも何んでも達者なもんでさア。あれで英語が出来て、音楽が出来て、油絵が巧くツて、え、何處へ出してもヒケを取りませんや」と言ふ者もある。

「なアに、あれは笹江の御亭主だつた、唐見の子ですよ。唐見が死ぬる時まで隠して置いたんですが、いよいよ斷末魔といふ時に、笹江の手を取つて、實は斯々此々の次第だから、何分頼むと遺言したので、初めてそれと分つたんださうです。臨終に言はれては焼餅の焼き様もありませんわ」と言ふ者もある。

だが、這んな噂は矢張人氣の一ツなので、見物の足は皆此方へ向いて来る。満員又満員。笹江の顔は、大ニコ〜。然るに登女子は、如何いふものか、此二三日ふさぎ出した。其理由は？

(1110)

登女子が浮かぬ顔をして居る其理由は次の如くである。
それは毎日一幕見の方から、極つて聲が掛る。如時でも一番目の短銃自殺の時に。

「伊東——」といふ聲が鋭く發しられるのである。

其聲が如何やら噴火小僧の様に思はれて成らぬ。顔がどんなだか、遠くもあるし大勢の中だから逆も分らないが、伊東といふのは伊豆を意味する。それに毎日極つて叫ぶのは、如何しても彼でなければ成らぬ。

或は噴火小僧の手下の者が、命令に従つて言ふのかも、それは分らない。

登女子は之を笹江に打明け様かと考へて居る間に、バツタリ其呼聲は仕なく成つた。

其仕なく成つた日に、恰度合ふ記事が其後の新聞に出て居た。座の方にも一寸其話はあつたが、一幕見の中で前科者が一人、刑事に捕まつたといふ。いや、それが途中で又逃亡したともいふ。いづれにしても氣味の好く無い話ではある。

中日過ぎてからである。入は少しも落ちない。殆んど満員續きの中に、東の高士間に見物に来て居る紳士連。其中に意外にも、河宮常美の居るのを見出して、登女

子はハツと思つた。

が、既うあんな人の方を見るでは無い。顔が變つたどて見捨てた人だ。洋杖で打つた人だ。目を呉れるのも厭だど、藝外の視線は少しも向けなかつた。

でも、チラリ、チラリ、見まいと思つても目に入るので見ると、非常に悔むた者の様。頂を垂れて下のみを向いて居るらしい。

其日は、それだけであつたが、明るる日に成ると、今度は常美一人で見物に来た。然うして本家茶屋を通じて、立派な花籠を贈られた。

「妾は之を受けますまい」と登女子はキツパリした態度を以て言ひ出した。茶屋の男は吃驚した。

事情を知つて居る笹江は、登女子を宥めて。

「お前さんの氣性としては、受ける氣に成らないでせうが。或る意味でこれは謝罪のしるしにも成るんです。又興行上の方から行くと、這んな立派な花籠を贈られて

披露するのは、景氣にも成るし。又お前さんの人氣にも成るんですから、まア受けるだけは受けたら好いでせう。それに今更、これを断ると成ると、茶屋の方でも困るでせうから……」と事を分けて説いた。

「では受けるだけは受けませうが、其代り妾は舞臺へ出て、お辭儀をするのは厭です。花籠だけ飾つて、頭取が代つて挨拶をして下さる様に……」と駄々を捏ねた。それは異例だけれど、此上何か言ふと登女子は出演を中止しさうなので、異例は異例の儘、披露する事に納めて了つた。

其後へ、樂屋番が名刺を持つて来て。

「え、登女子さんへ御面會ですか、如何しませう。断りませうか」

「断りませうかと其方で極めて掛るのは亂暴ね」と笹江は口を出した。

「でも、書生さんでね、へ、へ、へ」と樂屋番は笑つた。

登女子は名刺を見て。

「あッ此方なら會ひますわ。直ぐ此方へ通して下さい」

「へえ、左様で御座いますか……」

樂屋番は變な顔をしながら、彼方へ去つた。

笹江は解し得ぬ顔をして。

「登女子さん、誰？」

登女子は、ニツコリ打笑んで。

「妾の恩人が訪ねて來ましたの」

「何ッ恩人？」

「まア此方へ來ますから見て下さいな」

(III)

やがて来たのを見ると、薩摩飛白の羽織に小倉の袴を穿いた書生、三崎力であつた。

「御免下さい、お邪魔に來ました」と三崎は挨拶した。

「まあ能く來て下さいましたね」と登女子は喜んで、自分の敷いて居た座蒲團を取つてすゝめた。

「僕は實際、芝居なんて、餘り見ないのですが、登女子さんの評判が高いので、それ來たんです」

「本統にまあ能く來て下さいましたね」

「どうも何んですな、登女子さんは、あの時とは、別の人の様ですなア」

「然うでせう、あの時は實に……」

伊豆で初めて逢つた時には、全く酷かつた。癪病患者と少しも違はなかつたのだ。そんなに成らぬ前は、大騒ぎして戀慕うた者も、忽ち見向きも仕ない様に成つた。其中で此三崎力のみは、一方ならず親切であつた。

殊に魚燈坂で蜜柑を買つた時の嬉しさは、忘れ様とて忘れられるのでは無かつた。それから又熱海の稻村で一夜を語り明かした時の情味も、忘れる事は出来なかつた。

ジャム入のパンに餓を救はれた恩を返へすに、どんな御馳走を此人にしても好いと考へた。

笹江は、登女子と三崎どの顔を等分に見ながら。

「いつか話を聴かされた、あの親切な書生さんといふのは、此方なの」

「然うですわ。妻が乞食見た様に成つて居る處をね、救つて下さつたのですよ」と

登女子は紹介した。

三崎は首を振つて。

「然うすると大層僕が世話した様に當るのですが、なに、救ふも何もありませんよ。旅で難儀すると、誰だつて非常にツライです。唯、僕は、持合せて居た物を上げたに過ぎないです」と謙遜した。

「それが又却々出来ない事です。能く然ういふ時に親切を見せましたねえ、貰つた當人に成ると、どの位嬉しいか知れません。まア今日はゆつくり見物して入らつしやい」と笹江は言つた。

「それが却々ゆつくりなんて、仕て居られないです」

「何處で貴郎見て居らつしやるの」

「やア僕の如き書生ですもの、極つてるんで。は、は、は、立見ですよ」

「あ、然うですか。ちやア棧敷へ御案内さませう」

「や、それではお氣の毒で、なに、僕は登女子さんに面會すれば、それで好いんです」

「まアそんな貴郎、遠慮なさらなくつても好いのですよ。妾と登女子さんどで爲る様にしますから、貴郎は其通りに成つて居らつしやいよ。登女子さんとしては、どんなに貴郎を優待しても好いのですから……」

登女子も漸く笹江の後に附いて。

「蜜柑一ツが妾には大變な寶の様に思はれたのですから……芝居がカブリましたら何處かで御馳走を、ドツサリ致しますわ」

「や、それは恐縮です」

笹江は男衆に命じて、三崎力を西の棧敷にと案内させた。

後で笹江は登女子に向ひ。

「まア、氣のサツバリした書生さんね」

「本統に親切なんですよ」と登女子は衣裳を着けながら答へた。

「何處か御飯を食べにね」

「御師匠さん、何處が好いでせう。妾には分りませんから……」

「好いわ。妾も一緒に行つて上げるわ。カブツてからだど遠くへは行かれないから萬安くでも行くんですね」

「どうか宜しく願ひます」

「あんな書生さんに、ゴツさり御馳走して、ウンと腹へ詰める處を見るのも、一興だわね」

「色氣が無くツて、本統にね、好いのです」

(III)

喜劇の踊の娘を演了するのを待兼ねる様な氣が登女子にした。今まで斯ういふ事は無かつたのだが、自分ながら不思議な様に思はれもする。

笹江よりも早く身支度して待つて居ると、却々又彼の女の氣が長い様に思はれる。

其所へ約を履んで三崎力は棧敷の方から廻つて來た。漸く笹江も衣服を着替へて

誘ひに來て呉れたので、遠くも無いが俵をつめて萬安へ行つた。

笹江の番頭が既う先きに行つて居て、萬事手配りがしてあるので、直ぐにお膳が出た。

「女優は實に化物ですなア」と突如三崎は言ひ出した。

「何故ですか」と笹江は問返した。

「だッて、どうも、貴女なんか、舞臺で見ると非常に若く見えるんですからなア」と方は無遠慮な事を平氣で言出した。

「あら、舞臺ばかりでなく、本統に妾は若いんですよ」と笹江は笑つて了つた。

「化物と云へば、伊豆でお目に掛つた時は、妾はモット化物でしたわ」と登女子も笑ひ出した。

「や、化物の様な顔だつたから、それで僕には話掛ける事が出来ただけぞ。もしあの時、今の様に美しかつたら、恐らく僕は口を利かなかつたでせう」と答へて力も笑ひ出した。

「それは全く然うでせうねえ」と笹江も點頭き且つ微笑した。

それから種々御馳走が出る。酒をすゝめる。力は飲むよりは大いに食つて居る處へ、番頭が一寸笹江の耳に密告きに来た。

笹江は承知して、番頭を先きに遣り、二人に向つて。

「別室にお客様が見えて居て、一寸で好いからと招待されましたから、妾は顔だけ出しに行つて來ます。なに、直きに戻つて來ますから……三崎さん、澤山召上つて下さいよ……登女子さん、能くお酌をしてね……」と言置いて、出て行つた。

これは能く料理屋である事で、其所の女將や女中から、役者の男衆に渡りを附けて、一寸顔を出して貰ふといふ事は常である。

誰も皆それだと思つて居た。

笹江が行つた後では、登女子は又力に向つての響應の役目が重く成つた。

「貴郎にはどんなに御馳走しても足り無いんですわ。今夜ばかりといふ譯でも有りませんが……如何かね、ゴツさり上つて下さいまし」

「や、澤山頂いたです。既う腹が一杯です。併し、此次から御馳走して貰ふのなら、牛肉か西洋料理が好いですな。どうも日本料理で、斯うして響應されて見ると窮屈でイカンです。書生には書生の食物があるんですな」

「それでは今度は御師匠さんに相談して、何處か變つた處へ御案内致しませう」
「其方が好いです……時に、既う大分遅く成つたですから、電車が無く成ると大變だ。僕は是で失敬します」

「あら、電車が無く成つたら、自動車で送らしますわ。面白いのはこれからでは有りませんか」

「や自動車なんかで送られては大變だ。叔父さんに叱られるです」

「叔父さんと云へば、妾、北谷先生に、是非お目に掛つてお話を承はりたいと思つて居るんですが……」

「その内、來たら好いでせう。此頃は叔父さんも在宅ですから……」

「是非伺ひます……」

氣を利かしたつもりなのだらう、女中も誰も此所には居なく成つて、方と登女子と唯二人だ。

他の座敷では三味線の音が漏れる。唄ふ聲が聴える。悪巫山戯の聲が時々聴れる。だのに此方は森閑として來た。

料理屋の二階に居りながら、空田の稻村の中に寢て、互ひに身の上話をした時の様な感じが起つて來た。

「ですが三崎さん、熱海の一夜は、今から考へると、何んですか樂かつた様に思はれますわねえ」と登女子から言ひ出した。

「然うね、僕には何んだか寢苦しくツてね」と力は答へた。

「貴郎は寢返りばかり打つて居らツしやツたから、稻葉がゴン／＼音ばかりして居ましたねえ」

「登女さんだツて然うだツたよ」

二人の話には實が入つて來た。

笹江は未だ歸つて來ない。

(三三三)

笹江が席を脱したので、登女子と力と唯二人。盃の遣取りも然う頻繁にはして居られぬ。世間話と云つても、然う話題を豊富に持つても居らぬので、これにも行詰つた。

だが、いくら語つても厭きない問題としては、魚燈坂から熱海へ掛けての、それである。

一夜の草枕を語り出さうとした處へ、漸く笹江が戻つて來た。直ぐと登女子を廊下まで連出して。

「ねえ登女子さん、面白い事件が始まつたのよ」と密談いた。

「何んですか、面白い事件と云つて？」と登女子は問ふた。

「なにね、今呼ばれた彼方の客といふのはね、誰かと思つたら、一件なのでね」

「えッ一件？」

「そら今日花を贈つて來た人さ」

「それでは常美さんですか」

「然うなの」

「まア……」と登女子は呆れて、少しく反りかへつた。

「妾も驚いたのよ。だがね、種々向ふの話を聴いて見ると、少しは同情する處もあるのよ」と笹江は説き出した。

「如何してですか、何處に同情する處が有るのですか」

「だつてね、熱海で會つて時は、餘りに意外だつたので、ついあんな手荒い事をした。實に濟まなかつたと妾に詫びてよ」

「まア、今と成つて、そんな事を言ふのですか」

「よく／＼悪かつた後悔したのでせう」

「でも、然う氣が着けば、それで好いのですわ」

「處でね、是非登女さんに遇つて、直接に詫が言ひたいからツて、妾の前に両手を突いて嘆願なの」

「厭ですわ。妾、そんなにして詫びて貰はなくツても澤山ですわ」

「まア然う云つたものでも無いわ」

「それでは、お師匠さんは、妾が逢つた方が好いと考へて居らツしやるの」

「まア其方が穩かだ好いと思つてよ」

「他の事なら、大概お師匠さんのお言葉に従ひますけれど……妾、それ許りは厭ですわ」

「そんなに云つたものでも無いわ。妾、何も、お師匠さん風を吹かして、無理にお前さんを行かせ様といふのでは無いけれど……一ツ考へて貰はなければ成らないの」

は、今の日本では、未だ女優の權威が、然う正確に認められて居ないのですよ。ですから或る場合までは、藝人としての愛嬌も無くツちやアね、長い間の生活には損ですよ。なに、それも、唯顔を出して貰へば好い、詫ればそれで氣が済むといふのだから……妾、それ位の事をして、お前さんの名譽を如何斯うといふ事はなからうと思つてよ」

笹江の説き具合から考へても、餘程常美の方に軟化して居るのが見える。

此所で笹江に反對して、下らなく感情を害するのは不利益だ。一度は顔を立てた方が好からう。その後は此方の思ひ通りにしよう。

そののみ成らず常美が、どんな詫の言方をするか、それも聴きたい。

顔が醜く成つたので、破れ草履の如く捨てた男。それが今、女優として舞臺に立てば、忽ち女王の膝下に頼く如き輕薄な心。それを見て冷やかに笑ふのも一興であるを考へて。

「それでは、御師匠さん、一度は貴女のお顔を立て参りますが、此後妾が、どんな仕向けを仕ませうと、それは好いでせうねえ」と言質を取らうとした。

「あ、それは既うね、今夜の處だけね、顔を立て貰へばね」

「では妾、参りますわ」

「それで妾も安心した。さア一寸顔を直してお出でよ」

紙お白粉まで出して呉れた。

(三四)

登女子の性格は、ごちからと云へば、愛嬌に富む方である。ツンと澄し切つて位を取るなんど、そんな厭な事を爲るのは好まぬ流儀では有るが、今夜ばかりは女優の威厳を保つて、重々しく別座敷の常美の席に乗込んだ。

常美は喜んで之を迎へて。

「登女さん、能く来て呉れた。さア此方へ」と前からの馴々しさで話し掛けた。

「はい、今夜お伺ひ致しましたのは、女優としての登女子が招待に應じて参つたのです、前から御存じの登女は、あれは熱海で行倒れに成つて、死んだ筈で御在ますの、惨酷な洋杖で打たれました、往來で死んで了つたのです」と登女子は立つた切で、未だ座にも着かぬ。

「まア其事は、いづれ御詫をする。まア女優としての登女子さん、坐つて下さい」

「それでは御免蒙りますわ」

登女子は上座に着いた。

常美は、舞臺外の素顔の登女子の美しさ。渦邊家に奉公中よりも又艶やかさの増したのに、自然恍惚としながら。

「や、あの時は實に相濟まなかつた……といふのが、全く誤解から來て居るのでね。

登女さんを本統に泥棒の手引だと思つて居たのでね、それであんな手荒い事をしたのだよ。その誤解の罪を此處で謝罪したい爲に、今日は花も贈り、又此處へ招待した譯でねえ」と頭を下げ勝に言ひ立てた。

「お分りに成りますれば、それで宜しいのです。妾も江戸ッ子の血を引いて居ますから、いつまでも執念深くお怒り申しは致しませんわ」

「それは實に有難い。然う打解けて貰へれば、私は、どの位好い心持だか分らない。まア一杯……」と盃を献さうとした。

「いえ、然うお話が分れば、妾は之で御免蒙ります。既う今夜も大分遅う御在ますし……彼方にも未だ、お客が御在ます。彼方のは妾が主人と成つて招待した、大事な大事なお客ですから……」と言ひつゝ、登女子は立上りさうにした。

「まア、登女さん、待つて……未だ話したい事がある。是非、私の、本心も聽いて置いて貰はなければ成らないので……」

「左様ですか？併し貴女も亦、遅くお成りなさいますと、奥様が御やかましふ御在ませうから……」

「さ、それだ。房子と僕と結婚したに就ても、辯解がある。それを聽いて置いて貰はなければ成らないので……」

「あら……房子様と貴郎とは、前からの御許嫁では有りませんか。それが御結婚なさつたのに何も辯解する必用が無いでは有りませんか」

「それが有るのでね」

「でも、それは妾に關係した事では御在ますまい」

「全然無關係でもないのね」

「それは又……ゆっくり伺ふ時期が御在ませうよ。今夜はこれで失禮致します」

「そ、そ、それなら無理には留めません。が、時期があれば、最一度逢つて貰へるね」

「えい、まア芝居でも樂に成りましたら……」

「それでは何處か閑靜な處で……」

「まア其場合ですわ。左様なら……」

登女子は急いで其處を出た。

熱海の復讐を何程か遂げた様な氣がして、晴々とした。

だが未だ大きな凝結が何處やらに残つて居る様な氣がして成らぬ。

熱海の町の少間暮、洋杖で打れた無念さ口惜しさ。如何して忘れる事が出来よう。

忽ち不愉快極まる氣がして來たので、足を早めて元の座敷へ戻つた。

其所には同じ夜に、多大の同情をして呉れた三崎力が居る。

笹江から大分酒を強ゐられたと見て、眞赤な顔をして居る。

笹江は自分の子の様な若い力、それが浮世馴れぬ様を殊の他に愛して、非常な御嫌機で、これも強い酒量に似ず、今夜はホロリとして居る。

登女子は彼方の座敷の不愉快であつたのを忘れる爲に。

「さア、妾も今夜は酔はして頂戴な」

(三五)

興行は大成功で千秋樂を告げた。

其翌日である。登女子は唯一人で、森ヶ崎の鑛泉宿、松嶋に入った。

奥の離座敷に女中は案内した。

其處には既に一人來て待つて居る。それは河宮常美であつた。

「あッ登子さん、能く來て下さッた」

「つい遅く成りまして……」

「いくら遅くツても來てさへ貰へれば……」

「度々御手紙や電話で御在りましたから……」

「如何したって僕の方から、能く内情を話して、真底から打解けて貰はなければ、如何も寢覺が悪いのでね」

「既承はらなくつても澤山ですわ……今更仕方が無いのですもの」

其處へ女中が膳を運んで来た。

貝柱の酢の物にお椀が附いて居る。

「お銚子を置いて行つてお呉れ。用が有つたら呼ぶからね」と常美は言つた。

「は、畏まりました」

なに、言はなくつても其位の事は心得てると言ひ顔で女中は引下つた。

「ねえ登女さん、今更仕方が無いなんて、そんな事は無い。僕は何も自ら進んで房子と結婚した譯ではなかつた。周囲の事情が然ういふ様に迫つたのであつた。それも併し其時に登女さんが居て呉れたら、どんなにでもして打破する事が出来たのだ

つたが……なに、今でも房子を捨てる事が出来る。どんな強力の大反對があらうとも、それは顧みない。僕は進んで登女さんと結婚するだけの熱情を持つて居るよ」と常美は説き出した。

「まア、そんな事を仰有らずに……御酒でも召上りませ。お酌致しませう」と登女子は受流しに掛つた。

「いや、酒も呑むが、登女さん、どうか話を元へ戻してね。それも、すつと元へ戻してね。あの片瀬の濱邊まで戻してお呉れ。で、其間の出来事は、互ひに忘れて了はうぢやアないか」

「互ひに忘れるなんて、それはチト量りの掛方が違ひますわ。貴郎の方ではお忘れが出来るか知れませんが、妾の方では逆も忘れる事は出来ませんわ」

「そんな執念深い事を言ひつ子なした」

「それは女ですもの」

「それでは、あの熱海で打つたのが、そんなに口惜しいのだね」
「それは口惜しふ御在ますわ」
「ちや此處で僕を、氣の晴れるまで打返してお呉れ。いくらでも僕は打れて居るか……」

「あら、力の無い妾が、素手で打つたッて、何んに成るもんですか」
「それなら、どんな事でもするが好い」

「どんな事でも……して好いのですか」

「仕方が無い。僕が悪かつたのだから……どんな復讐でもするが好い。其代り、既うそれで綺麗に元へ戻つて貰ひたいのでね」

「宜しい。それでは、あの、貴郎の額を……」
「額を？」

「妾の踵で、蹴らして下さい」

「えッ、額を蹴る？」

「その代り、唯一度ですわ」

從五位の手前、女に額を足蹴にされるのを、黙つて受けられべきで無い。これには常美も當惑した。

登女子は冷笑ひながら。

「逆もそれはお厭でせう」

「うむ……」と常美は考へ込んだが、少時して。

「それで本統に登女子さんの氣が晴れるなら、頭を踏付けられ様と、額を蹴られ様と僕は少しも厭はない」と言出した。

よもやと思つて居のたに之れである。

つく／＼常美の心の賤しさに、登女子は呆れて了つた。

(三六)

「いえ、其お言葉さへ承はれば、それで澤山です。何も本統に貴郎のお額を蹴らなくツても好御座んす。既う綺麗に妾の腹は解けました。貴郎に何んの御怨みも御在ませんわ」と登女子は言切つた。

「あッ、それでは熱海の事が忘れて貰へたツて。まア實に嬉しい……こんな嬉しい事は無いです……だが、本統でせうねえ」と常美は聊か疑つた。

「本統ですとも……」

「後で何か企てるのでは無いですか。今は釋然として居つて、後に又大いに怒るのでは無いかね」

「そんな事は有りませんよ」

「然らば、打解けたといふシルシに、先づ一杯……」

「頂きますとも……」

「僕がお酌しませう」

常美は大喜びで酌をした。

受けて登女子は見事に呑乾して、それを常美に返へした。

常美は既う悉皆自分の勝利と考へた。それで氣をゆるして、呑み且つ語る間に、酔が早く循つて來た。

「ねえ登女子さん、僕は断然房子を離縁してしまふよ」

「だツて、たツた此間御結婚成さつた許りでは有りませんか」

「なに、それでも構はん。手續きが面倒なら面倒で好い。僕の方から放浪して屋敷を出て了へばそれで好いのだ」

「だツて、そんな事を成さつては、貴郎の御身分が……」

「や、身分は初めから捨て居ると云つて居るぢやアないかね」
「それ程までに……妾を……」

「だから、登女さんも、今日は是非、眞情を僕に見せて呉れなくツちやア……」

「眞情を見せて呉れど仰有つても……如何したら好いのでせう……」

「まア湯にでも入つて、氣をゆつたり持つて、それからの事だね」

「あ、本統に然うでしたね。森ヶ崎の鑛泉は大層効能が有るさうですね、舞臺の疲勞も治りませう」

「それが好いです。僕は既う先きへ入つて來たので……彼方の別室で、それで待つて居ませう。室が變ると、又氣が變るですから……」

「では、ね、彼方でお寢みにでも成つて、待つて居て下さいまし」

「いくらでも待つて居ます」

常美は既に酔の爲に、身が溶ける様に成つて居るが、登女子が打解けた言葉を掛

けて呉れたので、猶更心まで水に成る様。

即ち女中に命じて、別室へ移る手筈にした。

其所は池の中に突出て中二階に成つて、廊下づたひで行く様に成つて居る。

隣室も何も無い。故にいくら密談をしても他人に聞かれる憂慮は無いのだ。

だが、晝間だけに、光線の射し具合が氣に入らぬので、屏風を立て、一方を仕切らした。

女の湯浴の永さを思ふて、常美は一寝入りするつもりで、床を取らして身を横にした。

だが、如何しても眠られないので、腹這ひに成つて、巻蓆を燻かしながら、ニヤリ／＼笑つて居ると、やがてバタ／＼と上草履の音。

登女子が湯から上つて來たかど、喜んで、わざ／＼起上つて、唐紙の處まで行つて。向ふで開くと直ぐ此方で手を取つて、席に着かせる考へで、息を殺して待つて

居ると、ガラリと開いた。手を出さうとした。気が着くと女中が、水さしに洋盃を
持つて来たのであつた。

それから彼此一時間ばかり待つたが、如何したのか登女子は来らぬ。
長い湯だ。いくらお化粧をするからとて、餘りだ。

もしや出し抜いて、先きへ歸つたのでは有るまいか。

いや、歸る筈は無い。そんな筈は萬々無い。

抑も一人で森ヶ崎まで、僕と會見に来る位なのだから、僕の男振、僕の地位の僕
のすべてに信頼して居るに相違ないのだ。熱海の一件さへ解けて了へば、僕に服従
するのは當然なんだ。

なに、歸るものか。

今に来るだらう。

今に〜と首を長くして、又三十分ばかり待つた。

(三七)

餘りに登女子が来ないので、常美は不審を生じ、巻蓑なんか吸つて居られなく成
つた。蒲團の中に寝轉んで居られなく成つた。

起上つて離座敷を出た。知らず〜足は廊下を傳つて、先の座敷の方へ行つて見
ると、向ふ側の座敷の方で、登女子の笑ひ聲が連りにして居る。

では、出し抜いて歸つたのでは無かつた。湯上りのお化粧に女中ども話して居
るのだらう。先づ好かつたと思ひながら、此方の座敷の硝子窓から覗いて見ると、
意外にも若い男と唯二人、登女子は酒盛の最中である。

「失敬なッ」と思はず口走りながら、猶も様子を窺ひ見た。

登女子は大洋盃に麥酒を波々と注いだのを、青年の口の前へ突附けて。

「さアお上りなさい。男らしく一息にね」と言ふのが能く聴える。

「這んな物で呑むのは譯は無い。さア登女さん、持つて居て下さい。僕は口だけ出して、息も次がないから……」と言ひつゝ、洋蓋へ唇を附けた。

「えらい！能く呑んでね」

「既う一杯注いで下さい」

「では、今度は日本酒に仕ませう」

「初めから、日本酒なら好いけれど、途中からチャンポンでは酔つてから苦しい」

「好いわ。然うすれば妾、介抱してよ」

「僕の介抱が出来るもんですか」

「何故？」

「ヘドを吐いたり、亂暴したり、大變なんです」

「ヘドなら妾の懐中へ吐いても好い事よ」

「そんな事言ふと本統に吐くですよ」

「好いですとも、さアお吐きなさい」

懐中を開けて見せる真似した。ほんの襟へ手を掛けたゞけだけれど、此方からだと湯上りの乳房が見えたかの様に思はれる。

これでは何時まで待つても来ない譯だ。

馬鹿にして居る。登女子は人を愚弄したものだ。あの青年は抑も何者だらう。

多寡が書生に過ぎないのだと常美は傲氣を出して、ガラリと障子を開き。

「登女さん！」と一聲呼掛けた。

登女子は驚くと思ひの他、其所から見居たのは疾くに知つて居てよといふ態度で以て。

「何んです、御用？」と白々しい。

「御用も無いもんだ。僕の方は如何したの」

「あ、然うでしたね。貴郎、未だ居らっしゃったのですか」

「や、居らっしゃたも無いもんだ。僕は、どの位待つてるか知れないんだよ」

「おや、誰をですか」

「フッ……登女さん、忘れたの」

「何も彼も忘れて了ふといふ約束でしたわねえ」

「何ッ」

「妾は大事な恩人に此處で出會つたもんですから、其方と斯うして吞始めたのですよ。御免なさいよ。妾これから此處で散々吞んでから、又他へ行くのですわ」

「うむ——」

登女子は、豫め三崎方に事情を告げて、保護の爲めに此家へ来て貰つて居たのだ。萬一、常美が、暴力を揮ふ様な場合には、直にも飛出して、救つて貰はうし。又平和に済んだ時には、さも親密の間の様に見せ掛けて、向ふに失望させる様にと、

狂言は前以て立て、あつた。

正しく此復讐法は、額を踵で蹴るよりも利目があつた。

扱は登女子に一杯食はされたかと思ふと、常美は無念で耐えられぬ。ギリ／＼と齒嚙をして、義齒を狂はしかげた。

おのれツと暴力にでも訴へたいのだが、然うすればあの青年も黙つては居るまい。大立廻りに成つて、警官の出張と成ると、如何しても身分に關はつて来る。残念ながら此所では黙つて引下るより他は無いと、無念さうにビツシヤリ、窓の障子を締めた。

後では登女子の高笑ひの聲。

(三八)

笹江一座の新富座の興行が當つたので、直ぐと今度は二の替りを打つ事に成り、新狂言の本讀も済み、いよいよ稽古にまで掛つた。

無論登女子の役は一番光つて居るのである。

其忙しい稽古中、某富豪の名を以て、向嶋、奥の植半から招待された。笹江と共に自動車を買って行つた。

然るに其主人役たる富豪は差支があるとかで顔を見せず。他の客三四人に、富豪の代理と稱するのが一人で、連りに両女優を饗應したが、笹江も登女子も氣が乗らない。

「今日は夕方から舞臺稽古に掛りますから……」と云つて笹江は登女子に目配せを

して立たうとした。

「や、それでは斯う致しませう。其夕方までには。新造の自動艇を用意さして置きますから、快速力を出さして、隅田川を降り、直ちに築地河岸へ着けさせませう。なに、此所から自動車で行く半分の時間さへあれば澤山です。水路は廣いですから市中の様に障害が少いので、思ひ切つた速力が出せるのです」と主人代理はすゝめて已まぬ。

自動艇に興味を有した笹江は。

「それは結構ですね。それでは然うお願い致しませう」と受けて了つた。

登女子も自動艇には未だ乗つた事が無いので、それを待つといふのに格別異存はなかつた。

「まあ、それまでは御ゆっくり成さつて……」と、誰彼が殆ど包圍攻撃の状態で、酒をすゝめた。

笹江は素より女の中の酒豪であるが、登女子も女優に成つてから酒量が少しは上つて来て居る。殊に森ヶ崎以來、口が又一段、酒に馴れて来て居る。つい、知らず／＼酔はされて、此上は稽古が覺束ないと思ひ出して、それからは飲む振に胡魔化して居た。

其間に既う夕方。

自動艇は裏の棧橋に着いて待つて居る。

「それでは之で御免に致しませう」と笹江と登女子とは植半を立出でた。

三四人の客と女中達も見送つて来た。

春の夕の川風に、微醺の顔を吹かれるのは好い心持だが、自動艇の快速力に、髪の亂れを氣遣ふて、二人とも三越ヘルを冠つた。

二隻の艇が各運轉手付きで待つて居る。

艇が小さいので分乗せねばならぬのだ。

運轉手はいづれもセルロイドの風避け眼鏡を掛けて居る。

登女子が乗つた後の方は、髪面の、色の黒いのである。

「左様なら……」の聲は既う機關の音で消されて了つた。

前になり、後になり、夕暮の大川を自動艇は走つた。自動車とは違つて又壯快なものである。

登女子は少時好い心持で、浮世の事を忘れて居たが、不圖氣が着いて見ると、笹江の乗つて居る方は、遙か後に遅れて居る。

進行を停止して居る様だ。

「どうしたの、運轉手さん」と心細氣に問うた。

「如何も仕ない。あの船に無關係で、此方は此方だけ走れば好いのだ」と言ふ聲は確かに聞覚えのある響きだ。

「あッ」

「登女子！常美だよ」

常美が變相して運轉手に成つて居るのであつた。

「あッ貴郎は……」

「そんなに驚くな。船が動揺する」

「妾を如何しやうと成さるんですか」

「復讐！」

「えッ復讐？」

「復讐の復讐かも知れないんだ」

「そんな貴郎、酷い事を……」

「まア委しい事は房州へ行つてからに仕ようぢやアないか」

「えッ房州？」

「一時間七十哩の速力だ。直き着くよ」

(三九)

復讐の復讐。これから自働艇を房州まで飛ばした上で、どんな目に遭はされるか判らぬ。まさか一命を絶たれる様な事は有るまいけれど、第一、今夜の舞臺稽古の間に會はぬのみか、翌日の初日にも覺束ない。

先きも亦身分の有る方である。或は眞實の考へは、房州まで連れて行つて、暴力で如何しやうといふ様な、それ程でも無いかも知れぬ。然う云つて脅迫して、臺灣沖へでも連れて行つて、其所で謝罪させるつもりなのかも知れぬ。

先日の事を詫たら、再び森ヶ崎へ連れて行つて、一夜池上の離座敷に引付けて置く位が、關の山で有るかも知れぬ。

それだつて厭な事だ。誰が此人の意に従ふものかと、登女子は固き覺悟をした。

「如何だい、聲を出して救ひを呼んだら……いくらも傍を船が通るでは無いか。は、は、発働機の音が高いので駄目だらう。可哀さうだね」と常美は冷笑つた。

實際其通りで、つい近くを船は通るが、逆も人の聲は通じさうも無い。

それに既う日は全く暮れて、兩岸の家には燈火が入つた。

何時しかに吾妻橋も厩橋も通り越して居る。浅草公園と思ふ方の空に火光が映じて、火事でも有るかど疑はれて見える。

登女子は大冒険を決心した。

大川で飛込めだ、如何にでもして助かるだらう。相摸灘から伊豆の海迄漂流しても、運好く助かつたのだ。

品川沖へ出てからでは、海も廣く船も少ないが、此邊なら船が多い。それと見たら船頭が飛込んで来て呉れるだらうと、それに心を固めたので、弱い音なんか吐いては居られぬ。

「貴郎の様の方は本統に珍らしい。妾を森ヶ崎まで引張り出して下さつて、それであんなに失敗して置きながら、又房州まで連れて行つて、あれ以上の耻を掻かうてえのですか。華族の馬鹿様とは能く云つたもんですね」と罵倒した。

「何ッ！」と常美が怒つた時には、登女子は立上つて、自動艇から水中に飛込んだ。「あッ！」

艇を急に留め様としたが、全速力で走つて居たので、見る／＼惰力で行過ぎた。

常美は狼狽の結果、兩國橋の橋臺に艇を突當て、忽ち大破損。

此方の登女子は、一度水底に沈んだが、直に浮上つた。

幸ひ近くに大傳馬船が繫つて居たので、其所の船頭が突然素裸に成つて飛込んで来た。

暗い川面でも何處どなく水の光りはある。

誰が飛込んだのか、船頭は知らず。

又登女子は誰が救ひに來たのやら素より知らず。
忽ち船頭は登女子を引抱へた。

直ぐ其片手を取つて、脊の方に廻した。

登女子も幾分か水に馴れて居るので、突然救助人の首王へ縋つて、彼の自由を奪ふ様な事は仕ない。軽く其肩に乗る様にした。

船頭は二ツ三ツ水を掻くと、直ぐと船縁へ當つた。

下から登女子を押上げて、傳馬の中へ巧く入れた。

すべて此働きの早かつた事。

幸ひにして登女子は、隅田の汚水を飲む様な事はなかつた。

船頭も後から直ぐ上つて來た。

船の中は眞暗だ。

「氣をシツカリ。好えかい。ま、今、燈火を點けるでな」

「どうも有難う御在ました。危い處を……」

「本統にまア好かつたなア」

「お蔭様で……」

「今、明りを……」

「どうも……」

「今……」

船燈へ火を點けて、其所へ出して顔を互ひに見分せて、双方とも吃驚した。

「われ、登女子ちやアねえか」

「あッ、いつかの船頭さん？」

(四〇)

助けられたに人を缺いで、貫十九の半太にとは、餘りの意外に登女子は聲も出し得ない。

折を見て再び水中へ飛込んだ方が、未だ安全だと思はれる位。

處が半太は案外に優しく出た。

「やアお前に利根川へ突落された俺が、反對にお前を兩國川で助け様とは思はなかつた。まア併し心配しなさんな。俺もあの時とは大分氣性が違つて來て居るだア。既う何んにも悪い事は仕ねえ。や、待て〜、彼力でボートが破れたてんで、大騒ぎしてらア。他の船の者が救ひに行つてるが、お前が助かつた事をあらに知らして好いか如何かね」と言出した。

知らせられては大變であると登女子は。

「いえ、譯が有つて、妾は、あの船から逃げる爲に、自分で水の中へ飛込んだんで」と密言いた。

「それでは、まア、隠れて居るが好え、俺も既う善人に成つたんだ。何しろ船頭の俺だつて、此儘では寒い。お前さんも濡れた衣服では、風を引く。俺も襦袢を着るから、お前も此萬祝衣を着るが好え。銚子に縁のある衣物だ。萬更可慕しくねえ事もあんめえ。然うして、まア、石炭がドシ〜燻つてるから、西洋竈でまア、濡れた物を乾かして行つたら好えだアよ」と之も小聲だ。

「では、然うしませう……」と、つい登女子は其氣に成つて、濡れたのを脱いで萬祝衣を着た。

「明るいといけねわから、少し暗くすべえ」と舷燈の心を捻つて光を細くした半太。「や、何んだか、ボートの方が、此方へ寄つて來さうだせ」と密言く拍子に、突然

登女子の咽喉へ手を掛けて、力一杯締めた。

登女子は一時、氣が通く成つた。

それが如何してか、ハット氣が着いた時には、既に猿轡を食まされて居た。手足は無論縛られて居た。

見廣の原で乞食に苦しめられた時にも、斯ういふ目にされた。土浦の湖光亭でも之に類したのであつた。

まさか東京の兩國橋下で、這んな目に遭はされ様と思はなかつた。全くの油断であつた。

半太は出刃を板の間に突立て。

「やア、神様でえ物は有るもんだぞ。利根川で釣逃がした鯉は、兩國川で又引掛つた。今度は料理して、骨までしやぶらねえちやア承知出来ねえ。や、全く悪い事は出来ねえもんだぞ。俺を突飛ばして逃げやアがツたが、めぐり／＼又此處へ來やア

がツた」

自分が悪い事をしつゝ、ある事は、全然考へないのだ。

登女子は又かと思つた。男が女を苦しめて、それで自己の快樂を取らうとする、淺猿しさ。今に初めの事ながら、何處まで行つても同じ様な事が繰回へされて、馬鹿らしい限りだと考へた。

どの道、何の日か、誰にか、操を汚されるものならば、其中で比較的頼母しい人に、此方から縋るのが好いかも知れぬ。それが即ち永久連添ふ良人に當るのだらう。良人は貞操の保護者なのかも知れぬ。

そんな事を考へる程、餘宥を生じて來た。危難に馴れたとでも言ふのだらう。半太の方は、全然夢中である。

石炭の西洋竈に熾つて、青い火が燃上るのに、顔を照されながら、今や、其出刃を取つて、悪虐極まる脅迫に掛らうとした處へ、苦を極分けて何者やら入來つた。

「誰だッ」と半太は呼はつた。

「水上署の者だ。貴様、何するかッ」と向ふでも鋭く呼はつた。

「えッ水上？」

「神妙にしろッ」

「な、なにも悪い事は……」

「此女は如何したのかッ」

「へッ……」

(四一)

突然入來つた男は、一層聲を鋭くして。

「取調べるから水上署まで同行しろッ」と呼はつた。

半太は捕縛されては溜らぬと、突如水中に飛込んで逃出した。向河岸まで泳ぐの
だらう。

敢てそれを追はうともせぬ水上署の刑事巡查、帽子の廂を上げ、舷燈に面を照ら
せながら。

「登女子、俺だよ」と密言したのは、噴火小僧の小室淺之助であつた。

登女子は驚いたが口は利けぬ。猿轡の中に益々息が籠るばかり。

「登女子、大層お前は出世したなア。一足飛に名女優か」と言ひつゝ、傍に近く寄
つて來て。

「おい、女優さん。此間内大向ふで、伊豆と聲を掛けたのは、お前誰だか知つて
だらうな。それが又パツタリ仕なく成つた日も覚えてるだらう。實は最少で食ひ込
む處よ。その危ない中を未だ東京内に居るてえのも、如何かしてお前に巧く逢ひて
えからだつたが、今夜此所で出會はふとは思はなかつたよ。それもお前が這んな目

に遭はされて居ようとは、意外も意外だ。實は此次の空船に隠れて居ると、何んか此方が様子が變なので、密と苦の中を覗いて見ると、今の始末よ、好い撞梅に助けたもんだ」と言ひつゝ、つくづく顔を覗く様にして見入つて居たが。

「だが、惜しい事には、いよ／＼俺も朝鮮か滿洲へ高飛をしなければ成らない時が來たのだ。既う直きに出掛けなれば成らないんだ。残念ながらお前を如何する事も出来ないんだ。むざ／＼此花を人に折らせるのは強腹だが……然うかと云つて、お源の様に顔に細工をするのも可愛さうだ……や、せめてもの思ひやりに、お前の髪の毛でも貰つて行かう」と言ひつゝ、インパチスの袖の下から取出した短刀。濡れた黒髪を片手で握つて、船板に押付けた處で、ブツリ！切落した。其切口から血が垂れたと思つたのは水の雫。

登女子は此際、髪を切られた位は何んでも無いと思つた。

切落した髪を見て、噴火小僧は冷ややか笑ひながら、短刀の先で再び手足の縛を

切拂つて呉れた。

急いで登女子は起上つて、自分で猿轡を取つた。

「さア何うだ。登女子、御わかれた其口で何と云つて呉れ」と言ひつゝ、噴火小僧は、急立てた。

別に何とも云ひ様が無い。又云ふにも何にも口邊が痺れて居るので、舌が廻り兼ねた。

「何もそんなに他人がましくする事はねえや。伊豆の伊東ぢやア兄弟ぢやア無かつたか」と言ひつゝ、肩に手を加へた。

突然汽笛が鳴つた。

近くに繋つて居る川蒸汽が出るらしい。

連れて機關の音がし始めた。

波動が傳はつて此方の船までが動搖し出した。

此方の船に誰やら人が歸つて来たらしい。

「ちえッ、如何したッて纏まらねえ縁だなア」と噴火小僧は密言きながら、忽ち舷を傳つて何處へやら去つて了つた。

船から船へと飛んだのであらう。

登女子も亦何時までも此所には居られないので、急いで其儘船を出ようとした。だが、歩桁が引いてあるので困つた。

仕方なく矢張他の船を傳ひながら、辛うじて棧橋へ上り得た。

電燈で自分の姿を見ると、体には萬祝衣を着て居る、それに髪を切られて居る。這んな風で往來は歩かれない。

幸ひ河岸に客待の俵夫が居たので。

「俵夫さん！俵夫さん！新富座の樂屋口まで大急ぎ。代は幾干でも上げますよ」と呼はつた。

(四二)

車夫は變に思つたらしい。第一、男だか女だか分らない様だつた。

でも、幾干でも賃金を出すといふので、喜んで俵を待つて来た。登女子は直それに乗つて幌を深く下さした。

斯うして新富座の樂屋口に着いたので、漸くホツと息が出来た。今までは如何して呼吸して居たか分らなかつたのである。

頭取に車代の事を頼んで置いて、轉がる様にして笹江の樂屋に走り込んだ。

「まア……」と笹江は吃驚して、開いた口を閉ぎ得ない。

「御師匠さん、這んなに成つて了りましたよ」と登女子は其所にベツタリ坐つて言つた。

「如何したの？まア、如何したの？」と笹江は急込んで問うた。

登女子は、自働艇の運轉手が河宮常美で有つた事を先きに、それから貫十九の半太の事、噴水小僧に髪を切られた事を残らず話した。

笹江は顔を顰めて。

「それは大變です。其通りの事を世の中に發表したら、忽ち人氣に關はります。世間では變に之を取つて、昔の情夫に髪を切られたとか何んとか、尾に續附けて惡評するに極つて居ます。勿論新聞社の方は、如何にでも、それに頼んで、好い様に書いては貰ひますが……あツこれは期うしなければイケません。今度の役が重いのでそれが如何も巧く出来なもんだから、妾が非常に喧しく小言を云つたツてね。それで登女子さんが奮慨して、髪を切つて、決心を示したツて。ね、然うすれば又お客様が呼べるわ」

笹江の言ひさうな事である。何んでも問題が起つたら、それを景氣に利用しなけ

れば措かない處に、死んだ唐見の遣り口が見えもする。

「どうでも宜しい様に……」と登女子は言ふの他はなかつた。

「まア併し、今夜は舞臺稽古を直ぐ……一幕は代理で済まして置いたが、さア、二幕目から直ぐに……」と笹江は急立てた。

時間から云へば纔であつたが、其間の變化が多かつた。それに水中に落ちたり、脅迫されたり、神經を非常に勞して居るので、直ぐ舞臺へ出るのは、つらかつた。でも、武士に武士道のある如く、役者にも亦役者道があるので、勝手に休むなんて事は出来ない。場合に由つては、病氣でも、舞臺で死ぬ氣で出なければ成らないのだ。

舞臺稽古でも同じ事である。

今度の狂言は「戀の海賊」といふのに「娘五人」といふ二ツ。前のでは。濱の少女。後では、俠妓を勤めるのである。

前の興行物の都合で、舞臺が明かぬので、二日に割つての舞臺稽古で、昨日既に「戀の海賊」は済した。今夜は「娘五人」をやれば好い。それも一幕は済んで居たのだ。

* * * * *

初日が開くと相變らずの大入である。

それに各新聞に、髮切の通信が廻つて書立てたので、見物は其噂ばかり。

「甘えもんでげす。そんな事で人氣を取らふといふのは、既う古い」といふのも有つた。

古いも新しいも無い。已むを得ないのだ。表から眞面目に評したつて、道具裏では常に舌を出して居るのが此道だ。

(四三)

此興行も大當りに當つて居る内に、突然某新聞に「登女子斷髮の真相」といふ記事が出た。

それは、登女子は大泥棒の情婦であつて、それが笹江を瞞着して、今では女優に成つて居るが、相變らず逢引をして居る間に、痴話が嵩じて、あの斷髮騒ぎに成つたのだと、長々と毒筆を弄して、人に悪感情を生せしめる様に書いて有つた。

何處から出た種だか、素より分らないが、事に由つたら常美の方から出たのでは有るまいかと登女子は考へた。

笹江も之に就て、大方そんな事だらう。だが、取消を出した處で、何にも成らない。今まで自分も随分酷い事を書かれたけれど、人の迷藥に成らない限りは、其儘